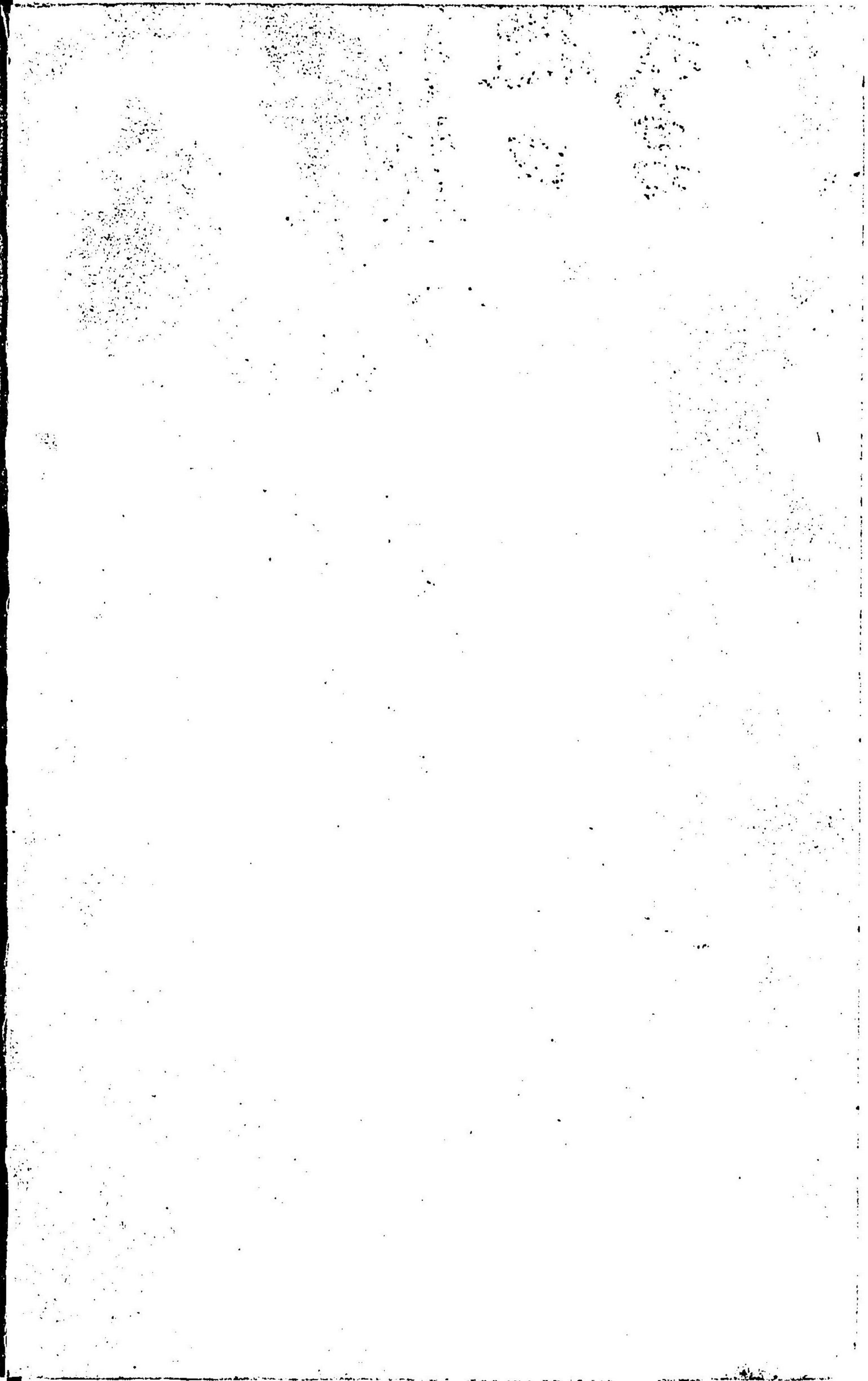


桶口義勇傳

田邊大龍講演
今村次郎速記



上野
文治
堂



樋口義勇傳序辭

古來敵討のお話のこの位ありましたか、實に數え切れぬ程にて、隨分小説や講釋の一ツの長物語りとあつて現はれたばかりでも相應にありませぬ、夫れ漏れたる分を合したから、この位あるものやら分りませぬ、尤も小説家などが根なし草よ花を咲せた造りものもあるとの事ゆゑ、本や講釋のものへこれでも事實であるとい申されぬ事、其の事實と作物とを論せぬ、一度の敵討をやるも容易ならぬ、様々の艱難辛勞をあし、中への返り討になる者さへあるに、此に説く樋口義勇傳と申すは、勇士樋口十三郎が一代の中に實父と養父の仇を討ちしといふ、即ち二度の仇討をさせしといふ、最も





476

樋口義勇傳

樋口義勇傳

田邊大龍講演
今村次郎速記

第一席

今日より開講といたしますは樋口義勇傳と稱けし只今以て上
州真庭村に子孫と遺せし眞庭念流の擊劍師樋口氏の祖先の傳記
であります、關東にて柳生侯小野次郎右衛門と除いては樋口十郎
左衛門といへば誰一人知らざる者もない適ばれ武藝の先生、此の
家へ養子とありし樋口十三郎義忠といふ人十五才にして實父の
敵と討ち其後養父の敵と討ちしといふ一生に二度の敵討といた
す、抑も敵討の数は百四五十通りもありますが一に富士二に鷹の
羽の打違ひ、三に名となす伊賀の仇討、是等が最も有名でござい

世に稀なる事と致して、其の間種々の珍談奇説等他の復讐談とは大
ひゝ其の趣むきを異よし、近來の小説等も多く見ざる所の愉快な
る講談速記、此度び弘文館書肆より發行に相成ります、殊ゝ最初の仇
討、上州新田の岩松滿次郎氏が助太刀をされし所など一層の妙味
あり、現に事實ありし物語りなれば諸君一際お身を入れて御劉覽あ
らん事を、書肆より代りて希ふものなり

吳竹庵 籙

樋口義勇傳

まず、一に富士といふは申上るまでもなく諸君御案内の建久四年五月二十四日曾我十郎祐成、舎弟五郎時致富士の裾野に於て工藤左衛門尉祐経と討たれし御話し、二に鷹の羽の打違いと元禄十五年十二月十四日播州赤穂の舊城主淺野内匠頭長矩の臣大石内藏之介貞雄以下四十餘人本所松坂町高家御旗本吉良上野介義英と討ち取りしといふ、三に名となす伊賀の仇討とは寛永十一年霜月廿日伊賀國上野城下小田町金傳寺門前にて渡邊數馬に助刀となし荒木又右衛門吉村、櫻井甚左衛門舎弟甚助以下大勢と討ち取り何れも後世の美談と相成りました、是れは敵と討たれた場所が宜い、夫ゆゑ講談師が辨じまするにもさも面白さうに申上るが諸君も長年御耳に觸れて居るから子供衆に至るまでも能く御存じで近來神田旅籠町俚俗藥店の敵討藏前天王橋女敵討八丁堀岡崎町左官の敵討あど、いふのはどうも講談に辨じましても讀み悪

樋口義勇傳

い夫といふのは場所が宜しくあゝ、愈々明晩は八丁堀岡崎町の敵討など、申上ると面白さうにも聞えませんが、明治維新後にも三十三間堀黒田邸に於て臼井六郎氏が一ノ瀬某と敵討とせしといふが矢張り名前が高くなりませんが、いふのは一ツは場所にも依るものと見え、樋口十三郎の義父の敵荒井大覺以下五人と討ち取りしは奥州松島瑞巖寺門前であり、此の講談の發りも申すは信濃國筑摩郡三熊村郷士宮澤靜馬といふ人物がありました、代々當所に住居となし、田畑山林も澤山數多の家人と召使ひ豊かに暮して居られる妻とみちと申し近郷に列びる美少女長年借老の契り淺からず中睦まじく致して居られしが如何なる事、子といふものが出来ません、如何に金銀が澤山あつても子のないのは至つて心細いもので俗に子寶といふ位、銀も黄金も玉も、何あせんまされる寶子に如るゆゑも『誰やらの歌で、古今集に出て居るさうです

樋口義勇傳

子供は俗に授けり物はほしいと思ふ宅にはせうも出来ないも
ので貧乏人の子澤山など、申して乃公の宅には澤山あるら
し入らないなと、いふ家にはア、出来ませう。○熊さん子供衆
が生れたさうですねへお目出度うござい升熊、せうして目出度
所の無暗に出来やがつて始末が悪いと思つてゐるんだ。○ナア、結
搦でさア、熊、些ども結構な事はねへ實に厄介物さ。○夫ア子罰が當
るといふもんだ、餘計拵へて置るければ行ません幾人ありました
ッけ、熊、エ一年子、で生れやがつて六年の間に七人居ませア
○「エ、何ぼせうも年子でも少し多いじやア、ねせんか、熊、左様
さ年子の間に双兒があつたら。○「ア、ハ、ハ、然うですると然う
いふ人は懐るに一人脊中に一人跡の方、五、六人も風呂へゑん
ぞ連れて行くも随分騒がしいものです、宮澤は子のないのを愛ひ、
みちや、せういふもんであらうな、新様、に欲しいと思つても子の出来

樋口義勇傳

んといふのは、みち、左様、でございます、私くしもせうの一人欲しいと
思つて居ります、すがせういふ物で出来ません、一、昨年、も昨年、も冷
えて居る、ら出来ないのであらうと御言葉もありました、ら長
い事、遊の湯治場へ参り充分養生、いたしました、が出来ん所、と見
ますれば此の未、覺、束、あうござい升、且、那、様、へ、誠、に、面、目、次、第、も、ご、さ
いません、静、イヤ、然、う、心、配、と、する、にも、當、ら、ん、欲、い、とい、つ、つ、も、天、よ
り、授、け、て、下、さ、ら、ん、の、思、は、る、前、世、に、於、て、我、々、が、何、の、罪、で、も、犯、し
た、と、で、も、あ、る、ら、も、知、れ、ん、み、ち、エ、然、な、事、は、ご、さ、い、ま、す、ま、い、矢
張、り、私、く、し、の、身、体、の、弱、い、故、で、ご、さ、い、ま、せ、う、寧、ろ、召、使、い、と、お、置、遊
ば、し、て、子、供、衆、の、出、來、る、や、う、に、遊、ば、し、て、は、如、何、で、ご、さ、い、ま、せ、う、
夫、は、止、し、ま、せ、う、妻、手、掛、は、置、き、ま、す、と、自、然、風、波、の、起、る、基、ひ、み、ち、
う、致、し、ま、し、て、私、し、の、方、ら、お、願、ひ、申、上、る、位、で、ご、さ、い、ま、す、ら
決、し、て、恪、氣、が、ま、し、い、事、と、致、す、氣、遣、ひ、は、ご、さ、い、ま、せ、ん、是、で、榮、耀、に

置く譯ではなし、世繼とお舉げにならうといふのです。更には仔細はございませぬ。是非どう願ひたうござります。静成るはど其方が左まで心配をいたす。置く事にしませう。お前の心に叶つたものを世話としてお呉れ、婦人の容貌形ちの美しいのと好む譯でない。あらみち「恐れ入りました。左様仰しやつて下さいませ。誠に困り入ります。貴方の御意に叶ひし者と静夫は行かん。貴様の目で見ても是ならば宜いと思ふ者とみち「左様でございます。夫では早速申上ますが、五郎右衛門の娘さまは何うでございませう。確の當年十八才至つて心掛も宜いやうにも思はれます。親父五郎右衛門も平常より一方ならぬ。旦那様の御恩にあづかり御恩返しが致したいと昨日も参りまして申して居りました。静如何さまさよならば宜し。あらう氣心も知れて居り。万事貴様に任せらる。宜きに計らつしやい。みち「左様でございます。直様先方へ申し

て遣はしませう。静さうの併し宅へ呼び取るのは世間の聞えもある。止ませう。みち「貴所一人位のお妾とお置き遊ばしても誰が何と申しませう。静「イヤ然うであらう。兎角世間は蒼蠅いものだからみち「然うです。夫なれば五郎右衛門の近邊に家と建て遊ばしても些細の事でございます。あら静「ウ、夫も宜らう。と茲に夫婦が相談と、のひ横谷村百姓五郎右衛門といへる者と呼び、おみちより相談をいたす。五郎右衛門は一二もなく承知。いたし歸宅いたして、娘おさよに此の事と申す。父が恩に預りし宮澤静馬夫婦の頼みも直ちに承知。いたし此の返答を五郎右衛門より宮澤夫婦へ申入る。宮澤夫婦は直に普請。いたさせ三日に一度五日に一度と通つて居られしが、色に溺れて致す譯ではありませぬ。折目切目も正しく兎角妻の身に取て見る。妾は邪魔といふのが世間一般、妾は幾ら宜い心掛けの妾でも矢張り、我が目の上の瘡と思

樋口義勇傳

はれるのが人情一般ですが是は左にあらす妻が撰んで持たせし
妻、さよはみちと主人と心得暇さへあれば宮澤家へ機嫌と聞きに
参るやうにいたそ、みちはさよを妹の如く心得己れの衣類手道具
杯と遣はし中睦ましく致して居れば誰一人譏る者もなく其の中
半ばばり相立つと、さよは懐妊といたしました宮澤夫婦の喜こ
び一通りならず指折り數へ一日も早く安産いたすやうにと神に
願ひ佛に祈りも甲斐あつて當る十月十日初産高く産み落せしは
玉の如き男子でありました、みちは万事さよの介抱赤兒の世話等
といたされました七夜に至り母子とも壯健名前と宮松と附け蝶
よ花よと手の内の玉の如くに寵くしんで居られました、みちは
熟々我が身の子の出来さると憂ひ女と生れて子と産ます、夫に長
らく心と苦しめし事皆前世に於て我が身が何か罪を作りしに違
あしせめては後世と樂々と送らんには佛の力と借るに如らずと

樋口義勇傳

深く佛道に歸依し、横田村といふ處ろに嚴禪寺といふ菩提所の住
職に實山和尚とて近邊にて聞えと取りし道徳堅固の聖僧が日々
説教と致されす是へ雨降り風間の厭ひもあらず参詣いたして居
られる實山和尚の甥同國松代の城主眞田家にて百二十石の知行
とも申受け東軍流の劍術指南といたせし塚田五郎次といへる性
來奸佞邪智にして、酒と好み色と嗜み、此の頃主家と浪人いたし、當
寺へ來り世話に相成て居りました、が、獨身者の氣散じにする事も
あく遊んで居りし伯父の手前もあればとて表は殊勝らしく説教
が初まるも其の座に列なり聽聞いたし或は次の座に於て心にも
ない念佛を唱へて居る、今日も相變らず参詣の群集、次の間の
襖と細目に開き思はず吐やく獨り言「五、ア、美しい女だ宮澤静馬は
果報いみじき人物だ、今眞盛りの櫻に均しき妻のおみちと左りの
手に持ち夫に劣らぬおさよと右に持ち面白き月日と送つて居る

勝ち五九助をうらなれと手に入れるやうな工風はあつた。九
左様さは向ふが公卿か大名の御臺奥様なら知らねへ事高が郷
士の御新造位に私しのそるやうにひやんなさりやア、叱度出来る
に違へねへ。五「ムウ、ムウ、ムウ」夫ア近頃添けな、輕少ながら煙草と
買て呉れ、紙へ包んでさした中、は幾ら白紙包み九「へ、へ、へ、

小人閑居して不善となす、藤田五郎治道あつた。九に迷ひ宮澤静馬
の妻貞操節義のみちを我が思ふまゝに致さんと類と友なる悪漢
九助の詞に依り情慾と遂んどて五「コレどういふ計略だ、早く聞
かして呉れ九「へ、へ、へ、五「是さ勿体と附すに五「且、其の計略といふ
るア一通りぢやア行ません御存じの如く、側口者のおみちさま宮
澤静馬といふ亭主があつちやア貴所が幾らやきもき思つても逆
も此の戀は叶いませんから寧ろの事静馬と亡きものにして終つ
て五「エ、エ、エ、夫ア少し手荒いちやアない、九「左様さ手荒くしるさ
やア此の計略は成就はしません五「シテ其上如何いたすのだ九「夫
やア跡は跡で私しが又大形の事といふやうだが富樓那と欺むく
辨と振い、良い計略が澤山あります五「成はせ然うすりやア、ア、ア、
番早いが跡の計略といふのは九「ハテ貴所も忙しあ、然う聞てエ

傳 勇 義 口 極

ア女房附の宮澤の家屋財産公乃が物にあらうたア九助も中々話
せる野郎だ九モシ旦那五ウム九助上首尾だ九左様さ貴所の御腕
前だゝら確るたア思ひましたたが万一の事があつて仕損なつちや
ア大變と及ばすながら腕貸しとする心得是まで參つて居りまし
た五夫ア大きに御苦勞是までは仕遂げたが跡の骨折は貴様に願
ひ九ナット皆まで仰しやるな其の代りに此の人の懐るにある物
は手附に私しが貰つて行きます五宜しく然うして置やア物取
りと世間の奴も思ふだらう拙者は大小と持て參らう九然うです
夫が宜うがアせう二人は己れが勝手物の物と携ひ取り跡白浪と退
散といたす翌朝此の邊と通り掛りし百姓衆宮澤静馬の死骸と見
て驚ろき誰も來い彼も來いと大勢の者と喚び傳へ一方は宮澤方
へ告げ又一方は横田村五郎右衛門の方へ知らせおみちおさよは
此の兇變と承たまはり双方とも取るものも取り取す夫へ來つて

傳 勇 義 口 極

見てあれば憫れな姿に泣くに涙も出す叫ぶに聲も出さるばり
みち「モン自所エー」さよ旦那様ア如何いふ事で斯様な御最期を遊
ばされたましたみち「さよやお前の家へ昨夜はお泊りでなつたの
らエ」さよ「ハイお戻りになると仰しやいましたのが丁度巖禪寺様
の四ツと打ちました時雨は強しお留り申したのではございまし
たが御存じの如くいつもお泊り遊ばした事のないおゑに強ても
踏ると仰しやいました今考がへて見ますれば宮松様が跡を慕ふ
てお泣なすつたも虫が知らしたのでございませうみち「然うらへ
モ一ね踏りの刻限と昨夜のらくく私しは寝ずに待て居ました
お歸りなさらんのも御道理何者の手に懸つて斯様の御最期とる
されしかコハ何と致して宜しうらんど利發のやうでも女子の悲
しさおさよも共に宮松と静馬の死骸へさし寄せて落る涙は雨や
小雨宮松は當年二才の東西とても辨まへぬもの父の死骸の側は

樋口義勇傳

遣ひ寄り餘念なく眺めて居りしがおみちや母のおさよの嘆きには
是も感せしものなるかッつとばかりに泣き出だそ宮澤家に拾ひ
取られて今では万事の用と足して居る手代文藏五郎右衛門と諸
共に泣き入る兩人と文モソ御新造然う御嘆きなすつた所が
今さら返らぬ事で御座い升かさよさん其の通り悲しいのは貴
所と私し共も同じこと御存じの如く私くしなどは三ツの時母
に連れられ旦那様の家に一夜の御厄介に預りし其の翌朝母は
俄の病ひにて終に空しくありましてより御慈悲深い旦那が是
まで育つて下すつた御恩返し其の爲めに役には立たねと御使
ひ申して預いて居ります此の文藏は御主人様あり勿体なくも親
御とも思つて居る其の旦那の御最期ゆゑとんるに悲しいる知れ
ません長く此うして置ますりやア餘計に人に見られまして御取
をれさらし申すやうなもの五然うだ文藏とんのいふ通り此の五

樋口義勇傳

郎右衛門も長い間御厚情に預つた上不束な娘おさよと御寵愛
宮松様まで舉げたゆゑ就て悲しいのは老人の常此の上何うした
ら宜らうと思つては居りますすが御新造鬼もあれ御身体だけは早
くお家へ持込ませう文如何にも五郎右衛門さんのいふ通り夫
が宜しうございませういふになく昨夜は御戻りが遅いも私し
がお迎いに参りませうと御新造様へ申上た所イヤ然うしたら私
が情氣嫉妬あら迎ひによこしたと云はれやアせんると仰しやい
ましたから留まつたやうなもの今思へば虫が知したんでせう
みちホソに文藏のいふ通り私が其の時留めたのも女の嗜なみ過
ぎたもゑ此ういふ事になりましたと互ひに講らぬ事と陳て居り
ましたが斯ては果しと村の者一同に勤められ文藏五郎右衛門等
が静馬の死骸と釣台へ載せ我が家へ連れて参り此段早速御領主へ
御訴たへ申上げ檢視役人來り死骸と檢たり別段殺したものの手

樋口義勇傳

掛りもあらざるに依り是非なく死骸はみちへ下され懸るに葬
ひつて遣はすやうにどの御言葉おみちおさよは文藏五郎右衛門
寺に相談いたし手厚く菩提所巖禪寺へ葬ひられました話變つて
塚田五郎治九助と計略を練し合せ宮澤様に於ても宮松は幼年か
みちは今三十一才此まゝ後家と立て通させるも氣の毒のもの殊
には草とわけ瓦と起しても敵と尋ね出して討んどいふには相應
の養子と致さんければ此の事も整のはす夫には幸はひ巖禪寺の
寶山和尚の甥塚田五郎治が宜らんと夫とるく小前の者に話とい
たす何がさて剛毅朴訥は仁に通し甲成はを乃公が思ふにも宮澤
の御新造アノ儘にして置くのも惜いと思ふ其の上名主様の役さ
でして居さつしやる者だから男がなくつちやア勤まらねへ巖禪
寺様の甥御さまるら此上もねへ宜人々と思ふ喃太郎作乙然う
だ夫に違へねへ一々密合として此の話まどめて上へ甲チー

樋口義勇傳

人の事は他人がしるさやア成ねへあら小前一同あら願申さ
う乙夫が宜らうと茲に相談ましまりおみちへ此の話といたす承
たまはつてみち誠親切は忝けぬが私は生涯後家と立て通
す心得二度の良夫に事へやうといふ心底は毛頭ありませんら
折角のお言葉だが皆さん決して悪く思つてお呉んなさいよ甲イ
ヤいはつしやる處實に感心としました併し茲が御相談だお前様
の爲にやア御亭主私等が爲にやア大事の御役元さまア、いふ死
に方となすつたもの何れ殺した奴があるに違へねへ宮松様が御
成長の後敵と討たせるとした處が劍術なり柔術あり教えて置な
さやア仕様がありますすめへ夫に此の村で此方様と振ちやア御役
元と勤める家といふものはねへ是非をうる一統の御願ひ
だあらウソといつてお賈ひ申てえ乙然うだとも今勘左衛門がい
ふ通り何事もお家の爲め旦那様の敵を討つしやるのにやア夫が

樋口義勇傳

一番宜らうと思ふウツといつて御承知となすつたら宜うがせう
みちハイ何のら何まで御親切にお嬉しう存じますよ考へまし
て御挨拶と申上り一同と返した跡へ五郎衛門來り文藏と諸共に
養子の事と勤められる茲におみちもさまくと思案をせしが一
同の勤めも尤ももの事良夫の敵と討んには尋常の事にては討て
ず宮松と成長とさせ常家の家督と先方にて十五才にも相成たら
相違なく渡すといはれるなれば一時此の身は亡き良夫へ不貞の
やうには當れども是れ良策と考へられ其の上家督相續濟みし後
其の身尼法師にでも相成り能致さんと思案と決し文藏五郎右衛
門初め小前の重立たる者と呼び承知の趣ひきと申上り一同大きに
喜こび夫では早速巖禪寺様へ参り實山和尚へお願ひ申さんどて
打揃つて参りました

第三席

樋口義勇傳

巖禪寺の實山といふは先にも申上りました通り道徳堅固の聖僧大
檀那宮澤静馬の後家おみち方へ我が甥五郎治を養子に申受けた
しどの言葉と聞き實イヤ誠に有難い御言葉だが愚僧一存にも参
らんから何れ當人に談じた上御挨拶と致します甲ハア乃でござ
い升此ういふ事は成丈け早い方が宜うございまするら御手数
も直にお話と願ひたいもの實ハイ承知いたしました何と申すの
は知れませんが那れも至つて堅固な侍でござるから甲どうかね
へ宜しく一ッお願ひ申上り實夫では此の場へ五郎治と呼ませうと
手と叩いて小坊主と呼び實是よお前塚田の部屋へ参つて皆さん
のお出での事といひ一寸是へと呼でお出で小ハイ畏こまりまし
た小坊主は立去る入れ變つて五郎治五是は伯父上様何の御用各
々能うお出でに相成りました甲ハイ是は塚田の旦那でございま
する誠に御不沙汰と申上りました毎度ハヤ方丈様にやアいろく

傳 勇 義 口 極

御厄介様に相成ります五イヤ手前ころ御疎遠に致しましたが今日はお揃ひで能うころお出でに相成た伯父上何の御用でござる實ア、お前と呼んだは外ではない皆さんが揃つて今此々、此ういふお詞貴様と強て宮澤方へ世話したいどの事五ハア左様でござるか御詞は千万忝けないが今ころ浪人はいたして居りまして拙者も生涯斯様な姿で居る心得もありません塚田の家名と一時も早く引起さんければ先祖へ不孝に相成りますも宮澤家へ養子の事は御免と蒙むりたい實然うる尤どもの詞皆さんお聞きの通り己れの家と潰して他の家を繼ぐ譯には相成らんとや是が申しますゆゑ左様御承知と願ひたい甲どうだ勘左衛門、ゑれいもんだお武士様でエものは何處か腸が違つてござらつしやる宮澤小町といはつした御新造此方うら頼んでも養子行たがつて居る者がでるくあるのに夫と迷惑だらうら断はるちうなア格別の

傳 勇 義 口 極

者だなア乙然うさゑれい者だ然ういふ方だらう乃公等はヒめ御世話しやうといふんだ〇エー御詞御尤もでござえますが其處をどうぞ宮澤家が餘まり氣の毒でござえますうら私共一同うらお願へ申升甲モ、御住持様お前様うらよくお勤めなすつて下せニ實山は氣の毒に存じ様々五郎治と勤め彼れ心中は計略充分に参りしと喜こびしが色にも出ださす五是は誠に迷惑千萬のお願み書家の宮澤が安危に拘はるといふと御一同のお詞といひ伯父上の御詞添へ委細承知致してござる併し宮松といへる小伴が十五才に相成た時は手前方より暇と申上るうら甲アレ乃公方でお願ニ申さねへ中に那アいはつしやるだらう五ハア各々方の方に何願ひとあります〇ハア其の十五才になりますと家督は譲つてお遣はしになりました度所様は相當の御分地の致しましてエ、五宜しい手前は然うなれば前申す通り

樋口義勇傳

田家と立るでござらう甲「ハア」何事も宜しくお願ひ申升茲に
相談一決いたし宮澤家へ吉日良辰と撰み五郎治は婿養子に相成
りました不便あるはおみち我が長夫の敵とは神ならぬ身なれば
露知らず悪人塚田五郎治の爲めに貞探と破られました肝智に勝
れし五郎治宮澤静馬と名前と改ため上へ届けも相済みしがみち
と勢はり宮松とさよが連れて参る度には我が子の如く寵くしみ
召使ひには万事目を掛け情と施こし小前の者を親切に世話いた
し遣はすも糸一同の者先代の宮澤静馬にも劣らぬ位るの適ばれ
み人と三人五人打寄れば評判至つて宜しく話變つて九助は一人
笑盡に入り九「アハハハ、有難エ乃公の細工が充分に整つて奴
ア宮澤家へ直つたあらアノ身上は半分は乃公が分手の皮と厚く
して草鞋と造る事もねへ是るら少うし樂をしやうと宮澤へ來り
九「今日は旦那様五「チー九助のよく來た何ぞ用九「エ少々申上

樋口義勇傳

たい事がありましたして五「ウー」何の用だ九「エ」外ぢやアござんせ
んが少々お願ひでござひます此の頃どうも出來が悪いので誠に
困りますかへッ、、どうも何分宜しくお願ひ申升五「よし」
併し今日はみちが居らんあら宜いやうなものの度々ぢやア困るセ
九「エ」夫ア旦那私ちだつて苦勞人ですお前さんの御都合の悪い
やうな事はしませせん御新造が居ねへと聞たら遠慮もなしに上
て來ました五「然うは是だけ持てけ九「エ」是ア旦那十兩です
五「ウ」餘まり澤山やると却つて爲にならねへらチヨイ、や
る事にしやう九「チ」トット旦那の前だが只私しが貰うんぢやア
ねへンですあらね此の家は墨鉄と打て眞半分私がおんですあら
ねへどうも恩に掛ねへでれ呉んなセエ五「コレ」野暮をいふな夫ア
改ためていはいでも乃公が知つて居る九「ア」すが旦那の前だが自
分の名前になると以前の約束と忘れたがるもんでせうら念の爲

樋口義勇傳

めにお断はり申して置きます 五「承知としたよ貴様大分酔て居る
あ九「左様さ偶にやア酒も喰ひます是が草鞋と道つて一粒幾らの
汗とあいたといふンぢやア飲めもしませんがね此ういふ大身代
を持つて居ると思やア何となく気が大きくなるますよアハハハ、
、マガ旦那私しの方は下働きで詰らねへお前さんの方は那んる
美しくしい御新造ばかりの外にお楽しみが出来たといふ事ぢやア
ございませんお熱たア此方へも助けてお呉んなせよ 五「コレ
無駄言といはずに早く歸れ 九「へー 御邪魔になつちやア済ませ
ん併し以前は然んな御約束ぢやアなるつたんです 五「ユ一知れ
て居るよ 九「左様なら又都合が悪きやア上りますらと九助は酒
と博奕で日と暮し金が失なる其の時は静馬の方へ度々無心果は
おみちの居る前も携はす みち「モハ所アノ九助といふ奴は
ンに無禮の奴ぢやアございません何で那んな思らしい事と申

樋口義勇傳

すんでせう 五「ウ下郎といふ者は致し方のない者である知ての通
り拙者の伯父の方に厄介になつて居る中親切に働いて呉れたる
ら偶ふ参れば何だ彼だとしてやれば附け上り縁に因る併し那れ
も見掛は悪いが根の悪いら奴でもないら眞人間にしてやらう
と思つて居るのさ みち「夫は結構の思召しですが餘まり禮に欠ま
すと他人の思はくもありますら 五「宜し／＼ 今度参つたら意見
と致して道はさう新様申して居るもの、三日に上すの無心に参
られ思だといへば大井の河原庚申堂の一件と云はれでもした其
の時はと思つて堪へて居るやうあるもの、家内の手前内外の事一
人心と苦しめしが寧ろのとに九助も大井の河原の二の鉢とやら
なけりやア我が悪事の露顯の基ひと心と固めて居る所へ 九「今
日は旦那御機嫌お克しう 五「チイ九助の能く参つた 九「へー能くも
参りませんが又御無心でございます 五「ウー何だ 九「イヤ今度

つて今度は根ッ切り棄切り是ッきり私しも久々で故郷へ参り
たくなりましましたから上りました五宜し皆ないふにやア當らねへ
メガ宅で少し相談もし悪いら氣の毒だが今宵……九ナツト且
那大井の河原へ出張た上庚申堂邊りで相談しやうと併しやるン
だらうが夫は眞平御免下さい五コレ家内が居らんら宜いやう
あゝ能くマア考へても見る然う度々の無心ちやア終始は互い
の爲にあらん九エー夫だら私が出来たんで此頃忌な伯父さんが
私の姿に目を附て居るやうですテ見ればお互へさまで爲にな
りませんらねニ當分故郷の方へ参りまして餘痰とさまして來
るつもり夫に就ちやア少しまどめてお貰い申て五然う然う
いふ譯なら五十兩だけ都合してやらう九エー有難うござい升何
分宜しくお願う申升五ソレ持てけ其代り當分來もしなるらうが
來れば九助仕方がねへら庚申堂だぞ九エー宜しうござい升眞

平御免下さいと九助も去る者上役人己れの事辭に目を附けし
子と見て五十兩の金子と貰ひ住み馴れた嚴禪寺と遠電と致しま
した

第四席

宮澤静馬は拾置けば我が悪事露顯の元九助と殺して終はんと心
得しに彼れは其の氣と察したる透電いたして姿は見せず寶山和
尙も其の後病死といたし誰一人頭と押へるものなくさよは折々
宮松と連れ参りおみちを對手に一刻も早く敵と探ね出だし先代
静馬の仇と宮松に討たせんと話と致して居ると聞き如何にも尤
どもと口にはいへど心には此の小兒成長の後如何なる所より我
と敵と聞出さん成れず成べくあら今の中押片附け枕と高く伏
せらんと思ひ居れども其の機會と得ず折しも十月末の事降り出
だしたる雪は追々烈しくみちと對手に酒盛といたして居る所へ

傳 勇 義 口 樋

今日は旦那様悪いものが降り出しました御新造様お察うと
ございます五「チャ誰うと心得たらさよる能くマア出掛て参つたさ
よハハ四五日御無沙汰を致しましたら一寸御機嫌伺ひに
おさよお出で此方へお寄んなさい嘸やア宮松も寒のつたらう五
コレさよ其方参つたのが幸はひ少々尋ねたい事があるさよ何で
ございます五「外でもないが貴様も何日まで然うしても居られま
い寧ろ今の中継附たら如何であらう宮松は此方へ引取るのらさ
よ「是は旦那さま飛でもない事と私くしはモ一生涯其夫と持うと
は思ひません只宮松様の御成長と待ち兼ねやも申上ました通り敵
とお討なすつた時は尼にでもなる心得でござい升五「アハハハハ
、誠に適ばれな答へだが口でいふほどに参れば宜いがさよ「イエ
私しは飽まで其の心得でござい升五「夫は威服の心得ぢや大夫宮
松も愛らしく相成た乃公が少し抱てやらうさよ「モ、旦那様際勿

傳 勇 義 口 樋

があると思ふございますら五「決して苦しうないマア宮松此方
へ来いマア宜いの今に大きくあつてな乃公が武藝と教ねてやる
ら天晴な腕前になり先代の敵を討ち修羅の妄執と晴せよと云
ひつゝ顔を眺むれば是が所謂神経が今まで愛らしく笑顔と造り
し宮松が己れが親と眺み結たる様子三見の魂しい百までもと此
儘此奴が成長なし我と敵と眺ふると思へば何となく恐るしく心
得手がゆるみしものマア、落し五「コレ不愛嬌な小見だみち「モ、
貴郎何と遊ばします子供の手でございますら抱心が悪け
れば思な親も致しませうが……さよや怪我はしないさよ「イエ
「エ怪我も何もありませんがさうら旦那様御免遊ばせマア此方
へお出で五「さよ早く連れ歸れみち「貴郎何ですれへマア五「イヤみ
ち氣に入らん奴だみち「マ、マ、何で然んなに御立腹でござい
升旦那様はね今日は御機嫌が悪いのらさよお前那方で御飯でも

樋口義勇傳

食べてお出で、さういまだ欲うございません、澤山積らぬ中にお暇と申し、上左様なら御機嫌お宜しう、みち「サヤお前モ、お戻りかへ道と氣と附けてお出で、さうハイ有難うございませんと極り悪げに宮松と連ておさよは立戻りました、みち「モ、貴郎何でそんな手荒い事となさいました、五「ア、恐るべし、みち兼て貴様に申さうとは思つて居つたが、場合がなつたら云はなつたが、アノ宮松は先代の胤だと思つて居る、みち「ハイ何うしたんです、五「イヤ、長年の間、其方も夫婦に相成り、子の出来ざる先代、静馬がさよに手と附て聞もなく、子供が出来るといふは、大概道理にも知れさうあるものだ、實はさよには隠し夫があつて、其の者の胤と先代へぬり、附け、其の上大井の河原で先代と殺し、當家と乗取らんといたせしに違ひない、拙者が聞込んだ事であるによつて、宮松と抱上て然う思つて見れば、實に恐ろしい夫ゆる思はず、取落したのだ、今度さよ

樋口義勇傳

が参つた時に、乃公が調べる、あら決して貴様留るなよ、みち「是はしたり、旦那様、何方でお聞なすつたかは知らぬ、いがさよに限つて、然んな怪しからん事とするものではございません、大方何の間違ひでございませう、五「コレ貴様までが彼等に欺むられて居ると見え、る利口なやうだが、流石は女、みち「イエ、然ういふ事はありますまい、五「黙れ、何事も乃公が胸にある先代の敵と早く討うと心得て、貴様にこそ、ういはねを、機や苦心として、調べて置たものがある、といはれて、みちも、長夫の詞に、争さふ事と得ず、夫より七八日、相經ち、今日し、も宮松と連れ参りし、おさよ、みちの居んと承た、まはり戻らんとする、と、五「サ、いさよ、ハ、ハイ、旦那様、何の御用でございませう、五「一寸來て呉れ、さよ、何方へ参ります、五「ヤ、乃公と一緒に来れば、宜い……、呼ん中は、誰も参つてはならんぞと、村内にて、御儀熱心の者へ、教へ遣はす、小やゝな道場へ、連れ込み、五「さよ、改ためて、貴様

傳 勇 義 口 種

て野の聲も雷の如くおみちは探々心と痛め不便者と思へども
助くる事も叶はず夜は深々と更け渡り庭の切戸を押開き忍び寄
たる一人の男邊りを見廻し進み寄り文「モ」おさよさまく
ハイ何方文「私しでござひ升」ハイ「文蔵様のでございまする文
ハイ文蔵でござひ升」ハイ「お可哀想に先刻よりお詫としやと思つ
て居りましたが中々私し如きがお取成しとした位おぢやアお聞
きがありません夫ゆゑ差扣えて居りました」ア今の中に當所を
御發足なさいまし「ハイ」いつに變らぬ御親切聊の愛之のない
事と文「エ」夫は知れて居り升何事も御幸抱が肝心宮松様と大事
になされて御成長の後は又宜き事もありません是は些かござ
いますがお金が二兩ございますら路用となすつて何れへお
立退きが肝要です「ハイ」ハイ「忝けなうござひ升別段是と申して志
す所もありませんが世間に入鬼はないと聞く文「エ」然うです横

傳 勇 義 口 種

田川と渡つて今夜の中に一里も先へ踏出してお置さるらんけ
れば往んが相憎恐しき此の雪に身体が痛んぢやア宮松様とれ連
れるさるも骨でせう横田川まで私しがれ供いたして「ハイ」誠
に文蔵様の御親切のはお忘れは致しません文「エ」其の御禮には
及びませんと兩人の繩を解き文「モ」定めし御空腹でね出でと存
じ握飯と拵らへて持て参りました是を食して早く支度をするさ
い宮松様は私しが懐ころで御温め申しませんと寝る方なき介抱に
さよは食事といたし文蔵より金子を申受けさし足扱足忍んで常
所と出立いたし急がんとすれど中々に足の運びもつかばこそ開
を文蔵が傍はりて横田川へ漸々来り渡し場の親父と起し在と越
さして東西に別れ渡し場の船頭には堅く口留めとなし何食はぬ
顔にて夜明け中に立歸り己が臥床へ道入りいつにゑく翌朝遅く
起出でし静馬は前夜の寒氣に兩人は凍え死にでもなしたるるら

んと雨戸を開いて見ておれば、露脱の殻や空蟬の姿は見えす。五「ッ、是れはさよ宮松は如何いたした、みち一寸れ出でみち、ハイ何でござい升五「コレ見さつしやいさよも宮松も居らん、扱は貴様が彼等兩人と昨夜の中に遊したなみち、ハイ一一向存じませんが何方へ参りましたらう五「ナ、知らん氣遣ひはあるまい、文蔵貴様大儀るがら一寸来て呉れ文「へエ、御早うござい升何の御用でする五「イヤ外ぢやアないが宮松さよの兩人取調へ中何れへの参つた様子である、若い者にさしづとして五郎右衛門の宅は云ふに及ばず手分けと致して尋ねて参れ文「へエ、夫アどんでもある事ですございませした、何處へ遊ましてございませしたらう五「無駄事といふな遊た先が知れるなら決して尋ねる事はない文「イヤ昨日ア、してれ責めあすつたもんでするら遠く行ける氣遣ひはございません五「如何にも然うだ如才もあるまいが万事油断なく文「へエ承知致

しました夫より文蔵は若い者にさし圖と致して其身も共に尋ねしが正午半頃は、更に行術の知れざる趣むき立歸つて申入れ猶も八方と夜と掛て探ねしが知れずといふて立歸つて参りました宮澤静馬は定めしおみちが遊せしに相違あるまいとて疑心愈々暗鬼と生じ夫よりしては兎角に中も睡ましからず家に居る日は稀にして近頃馴染の妾の家のみ参り酒と色とに心と奪はれ遊び暮して居りました

第五席

古へよりの詞にも、才子の多情佳人の不幸と能く穿ち得たる語で貞操節義のおみちも、僧老同穴の契りと結びし最愛の良夫に別れ家の爲りて連れ添ひし二度の夫の心宜らず、驛るさおさよ愛らしき宮松と殺さんどせしと何者かは知らず助け何れへ行きし生死のはども相分らず夫と己れが爲したる業と盛りの事に打腹

種口義勇傳

立ち手荒き舉動のみならず近頃變る不身持に内を外あす放埒に
是も我が身が先の世に造りし罪と思へばこそ更に長夫と怨む心
もなく亡き人の忌日命日我が身の罪業消滅と祈るより外他事も
なく昨日と暮れ今日と経ちハヤ其の年もいつしり過ぎ翌年六月
中旬の事晝の暑さに引替へて片影出来し八ツ半頃遠くもあらぬ
菩提所へ來つて墓場の掃除も濟せ二世安樂と佛に頼み立戻らん
となしたる折思ひも寄らぬ後ろら九モ宮澤の御新造少しお
待みさいみちハイ何方です九エ私ですと云ひつゝエツと出で
たる男洗いさらした地淺黄の汚れ目目立つ單物繩のやうなる三
尺帯被りし手拭左りに掴み九いつも御機嫌御克しうみちチーお
前は以前此のお寺に長い間奉公した九助とのでありましたら九
エー仰じやる通り九助に違ひございませんイヤモ一何日見ても
美しくしい近郷近在で宮澤小町と評判と取りし貴女の姿久々にて

種口義勇傳

拜見いたしウツトと致して居りましたみちホ、ホ、何もお
前の輕口は今でも折々噂が出ますツテ何日戻つて來なすつた九
へエ、ツイ二三日前に戻りました以前御厄介になつた先代の且那
様の御墓掃除と致さうと參つた處ろへ和女がお出で、夫ゆゑさし
扣えて居りましたみちチヤ然うらへ夫でも奇特に能く參詣とし
てお呉れたねへ御親切は忘れませんよ、定めし且那も草場の際で
喜こんでお出でせう九何う致しまして御禮ぢやア痛み入りま
す夫に就て和女に少ふし願ひがあるソですが聞てお呉んなさ
らねへらみちハイ何の願ひであります品に依たら聞ても上や
うが九へエ夫ア有難うござい升早速ながら申上ますが和郎の身
体と少うし私しにお貸しあすつてお呉んなせエみちエー何だど
へ九イヤサ解らねへ事はありますめへ少しの間身体と借り草と
敷寝の假枕抱れて寝ねとして貰ひてエみち黙んあさい先刻らら

樋口義勇傳

無禮もはどのあつたもの私と何と思つてお出でた荷且にも元
苗字帯刀御免の宮澤静馬の妻何で肌身を汚されやう九、エ、
、、チ、イ、く、野暮に大きな聲としなさんな、どうせ汚れたか
前の身体一度や二度貸してお呉んなさつても宜いぢやアと
んのみち、何と申す汚れた身体とは誰と捕へて其のやうな事
す九、チ、イ、外に人がねへんだらお前とさしていふのさみち、
我が身が何で汚れて居る九、夫ア種と知らねへら汚れて居ねへ
と思ふんだア、く、急すと一ぶくやつた上汚れて居る話を
聞たきやア、おつくり聞して上やせうと云ひつゝ、倒れし石塔に
打掛て取出だす紙煙草入其の中より粉としゃくつて煙管へ詰め
カチリ、く、と火と打付け脂下りに煙草くおらし上目使つておみ
ちの貌と餘念もなく眺める悪漢おみちは心に掛る此奴の詞、みち、
コレ九助今の話と聞らして呉れ何で此の身が汚れて居る九、左様

樋口義勇傳

さ現在敵と夫婦になり心の肌紐ゆるして居りやア立派に身体と
汚したのサ、みち、エ、何と申す現在敵とは九、チ、イ、今の御亭主宮澤
静馬、前名塚田五郎治は實に高連の野郎さ、忘れもしねへ足掛四年
以前の事、お前が毎日巖禪寺様へ御説教と聞きに来る時、美い
女だ惚々した此んな女と女房にすりやア命も何も入らねへど私
しに相談を仕掛られ夫ぢやア此うして此うやつてと曲尺と當た
悪巧みが十分と、のい宮澤家の婿養子榮耀榮華活計、歡樂自由な
事として居るに付私も思はぬ錢儲け度々無心に行たゆゑ思はず
樂としましたが身分に餘る錢遣いと上役人に目と附られ其の上
ぬ、のらぬ五郎治が捨置く時にやア其の身の悪事が露顯とすると
大井の河原へ引出して先の旦那と同一じやう私しとばらす下心
見振た九助が五十兩の金と貰つて高飛びあし三ヶの津と初めと
して諸所方々で飛で歩行き行く先々で悪事と働らき久々戻つた

三熊村、以前の好みと慕詣り丁度折よく來合したお前の姿と見るに付け思はず起る凡惱の退へとも去らぬ天障菩提の塵にはあらねども先夫と戀しと思ふなら私しと心と協した上、敵と打て上なすつたら定めし草場の影で貞女の者だ、忝けふいと旦那がキツと喜こぶだらむモ、此の一件と聞たらば汚れぬ身体とは云へますまい、みちエ、何と申す扱は今の良夫は先代と大井の河原で九アハ、ハ、ハ、驚ろきなさるるのは御尤ともだ、現在作者の私しが証人みちエ、扱は左様であつたるる知らぬ事とは云ひながら長の年月肌身を汚され、嫁づいたのが残念だ、定めし先代静馬殿は妾と怨んでお出で、あらう御免し下さい、南無阿彌陀佛、九モ、念佛と唱へて菩提と吊らふより今もお話とする通り早く敵と討ちなせ、及ばすながら腕貸しとしませう、其の代りには只た一度で宜うがすうら身体と貸してお呉んなせ、何故返事とし

なさらねへ思ふ、應る早く返事と聞らしてお呉れ、エ、自強体ぢやアねへ、おどさしのぞいたるおみちの顔何とも云はず暫らくは思案に餘る様子なりしが、みち「ハイ、九助迄の今の親切忝けない私のやうなもの、夫はどまで思つてお呉れか如何にも心に從がひませう、九エ、其の、ア有難エ、又も御意の替らぬ中早く此所にてみち「アレ、氣の早い道路で然んな事が出来ます、今の詞に偽はりあるくば、晩に忍んで裏手の切戸押せば開くやうにして置くら私、私の部屋へお出で、あさい酒や肴の支度まで充分致して置ませう、九エ、ハ、ハ、夫の、ア又一層有難エ、夫ぢやア御新造偽はりはありませぬへね、みち「何で嘘と吐ませうお前こそキツ、間違いはあるまいね、九エ、何で私が間違ふもの、是ら髪月代でもして男と上つて参ります、打冠つて居りやア、ころ汚ならア見えませぬが、是でも作つて御覽なさい、満更見捨た者ぢやアねへの、何しろ御新造キツ

傳勇義口極

ト行ますせみちハイ待て居ります九夫ぢやア後刻と約束いたし
右と左りへ別れしがおみちは家へ立歸り心地悪しとて己れの
間へ引籠り何や彼やと密りに支度と致して居られしが良夫静馬
は妾の處ろへ日が暮てより參られる文藏はおみちの部屋へ參ら
れ文「モノ御新造貴女御加減がお悪いと承たまはりましたが陽氣
が悪いららぬ氣と附け遊ばせみち「イヤ文藏お前を呼うと思つて
居ました文「ヘエ何の御用でみち「ハイ少し折入て頼みたい事が
ある外では無いが先年行衛知れずに相成たおさよ宮松アノ二人
と尋ね出し先代の旦那の敵と討たしてお呉れ夫に就ては何かの
様子此の書面に精しく認ためて置きました茲に金子が五十兩
之とお前にお渡し申す何ろお頼み申升文「ヘエ何ろと思ひました
ら宮松様やおさよさんの行衛と尋ねると仰しやるが然んな事と
したら旦那の御立腹はぞんなだの知れませんみち「イヤ跡は私か

傳勇義口極

宜いやうに致して置くら二人と尋ねる夫までは此の書面は何
うしても開いて呉んなさるる文「エ何かは知りませんが長こま
りました余り夜の更ぬ中お休み遊ばしたら宜しうございませう
みち「ア然ういふ事に致しませう呉々も文藏お前にお頼み申し
た文「ヘエ承知いたしました文藏は合點行じと思へども主の頼み
に二品と預かり己れが部屋へ立戻る跡におみちは先刻九助の言
葉近頃思ひ合するは良夫の差料持らへころ變つて居れ中身は確
るに先代が秘藏いたせし二字國俊は彼等談合の上致せし業と
思へば空恐ろしく存せしも女子の腕にて中々に敵と討つ事思ひ
も寄らずさりとて此儘致して置らば不貞の上の其上に天罰必ず
報ひ來り如何なる難儀に出達はらんと思へば此身と抛つて詫す
るより外致し方なし兎やせん角やと思案の後いつの夜も更け九
「さる雨戸と開いて違りと見廻し忍んで遁入りし思渡九助九「モ

御新造御約束の通り参りました先程お見受け申した時より身
装と換てお出でなさる其のお姿は又格別道入ても宜うございま
すのみち「チー」待て居りました早く此方へお出で九「エー」有難うご
ざり升、ワ且那はみち「ハイ」宜い壁梅に不在です九「へ、へ、然つ
アどうも上寸法精しい事は寝物語り餘まり嬉しいので夢ぢやア
ねへおと思はれますみち「アイ」私も矢張り然う思ふがお前時刻の
言葉に嘘はあるまいね九「エー」何で嘘と吐ませう其上確るの証據
といふは今の旦那が持てお出でなさるだらう中身は二尺三寸二
宇國俊の刀ころ動きの附ねへ確るな証據みち「ウム」夫れ承まはつ
て疑ひも晴れました酒の支度も餘りの嬉しさまだ致しては置ま
せんでした九「エー」酒も何も入りません媒介なしの御床入り
御免あせエとしなだれ寄ると此方へお出でと手と伸し九助の首
へ手と掛れば薬で結いし海鼠の如く「ウイ」もなく寐轉ぶと隠し

持たる八寸五分の短劍と扱く手も見せず左りの助へ拳も通れど
突立たら急所の痛手に堪らばこそ聲と上んとおしたると寐衣と
スッホリ首べら打掛け長夫静馬の敵の片汝覺悟なせよといふ
より早く取直したる短刀にて九助の咽喉と貫ぬけば拳とつらみ
斷末魔因果はめぐる芋車の人を取る龜人に取らる九助の最期の
騒ぎにも誰一人とて来る者なく心静るに死骸と那方へ片寄せて
嗽ひ浄手と致し身と清め先代静馬の位牌と正面の机の上へ押直
し南無阿彌陀佛「願生菩提免させ玉へ知らぬ事とは云いなが
ら不貞の御詫は斯の如くと取直したる短刀にて我が咽喉へ貫ぬ
き笛のつかり、ア、憐れひべし妙齡の佳人茲に空しく相成りしは
天は是非の塚田五郎治の身の上此上如何に相成るか一寸一寸息
ついて辨じます

翌朝まで一人として知る者もなかりしが何日にあかみちの起
出る事の遅ければ下女が來つて下女も御新造さんお起き遊ば
せ夫ども御加減でもお悪いのでございますの問へども答へず女
眞平御免下さいと涙開ひて大いに驚るさ女アレ誰郎の來て下さ
いました大變でございます男「ナイ」おすみぞん何うした女「イエ
一寸來て下さい大變です、何だろうと下女下男來つて見れば此
の有様早速此の趣ひきと静馬の出先へ申入れる、取違ひて立戻
りしが静「コレ」騒ぐな大方氣でも違つたのであらう、何しろ上
へ届けんければ行まい文「へ」左様でございます、静馬は女房みち
亂心の趣ひきと訴たへ死骸は巖禪寺へ葬ひり、九助の死骸も取
片附といたし別斷嘆く様子もなく初七日が相経ては妾おてうと
呼び入れ、憚る者もあく淫酒に長じて居られました文藏はおみち
の自殺の様子と見て別して心と痛み願まれし事と果さんと内々

支度といたし、宮澤家と立出でおさよ宮松と尋ねて手紙と手渡し
致さんど何方どもあく出立に及ぶ茲に話跡へ戻つておさよは文
藏の爲めに九死と遊れ一生と保ち宮松と連れ同國薩時の下田中
村といふ所に聊さるの知己があれば是と便つて参りしに禪林皇
後の御歌にもある通り

唐土の山のあなたに立つ雲は

此所で焚く火の煙りなりけり

何れへ参つても世間に人鬼のなといふ比喩の通り在郷の人は
分て親切、幼年の宮松と連れ尋ね來りしおさよと不便に存じ幸は
ひありし明家へ住はせ、米だ炭だと恵み呉られる、さよは縫針は
勿論手跡も相當に出來るにより此の恩返しとて里人の子供等と
集め手習ひ、縫針の稽古をいたして遣はし、結句大勢の村人に愛せ
られ、顔と世話いたさん成は嫁に申受んと來りし者も数多なれど

樋口義勇傳

皆断はりといふて更に浮きたる事もなし宮松の成長と樂しみに
致し茲に四ヶ年間別段に變りし事もなく暮し居りしが頃しも寛
永元年六月中旬兎角に氣分の勝れずと打臥して居られると一
の者心配いたし此の邊には宜い醫者もない事ゆゑ寧ろ草津へ湯
治に行なすつたら宜らう然うだ然したら早く全快とさつしやる
だらう平常あら悴や娘が厄介になつて居る御禮に俺も二百出す
あら貴様も二百出せ太郎右衛門も百出せ孫兵衛も出せと各々出
金といたし二兩足らずの金子も調のへば之とおさよに渡し懸る
にいふて呉れるさよは殊の外喜こび一同の者に暇と告げ宮松と
連れ杖にすがつて當所と出立いたし山道と五里ほど參り泊りし
に身体殊の外勞れ充分寝入り翌朝布團の下に入れ置きし胴巻と
見れば紛失いたして居る今さら如何ともする事叶はず此の趣ひ
きと主人に申入ると旅籠屋の亭主氣の毒に存じ旅籠と貸したの

樋口義勇傳

みならず鳥目二百文と恵まれる路用と失ふひしとて今さら歸る
事も叶はざれば草津は大勢の旅人も參つて居るに依り針仕事な
と致しても兩人の生活の足りぬ事もあるまいと心と取直して出
立とせし道歩取らぬ事ゆゑに泊りを重ね着換の衣類まで賣り
慈悲ある人と見れば袖や袂へ縫り恵みと受け通り掛つた草津手
前向ふに一群、劔菱に男山の旗と纏ひし乞食共おさよの姿と見る
よりグル／＼とどおつ取り巻き甲「ヤイ／＼見りやア貴様は旅の
者だあさよハ左様でござい升甲左様でございませすぢやアねへ
や手前等のやうな新前の爲めに乃公等の繩張りや邪魔されて堪
るものゝ乙然うだ／＼稼ぐあら何故仲間入りとしねんだ丙「チ
越中や加賀のいふ通りだ此奴等の爲めに領分とせばめられちや
ア乃公等の賃ひがなくなるつちまう、ア仲間入りとしるさよハ
仲間入と申しますと何うしたら宜うございませす丙然うよ仲間入

樋口義勇傳

てエなア酒一升に着代として二百貫な夫で振舞つてさよ「モ」
其の鳥目がありますれば斯様に貫つて歩行きは致しませんぞう
を御堪辨遊ばしませ甲「成らねへ」錢があきやア乃公等のいふ
事と聞け然うぢやアねへの越前乙「然うだ」此の美くしい面ア
見ちやア酒も錢も入らねへ鎮守の裏山へ稼ぎ込んで大勢寄て念
佛講だ丙「此つア有難エツレ宜らうと野伏り大勢で引立んといた
す旅人は不便と思へども乞食の争ういもゑ誰一人口と出す者も
あく己が勝手の事と申して居る大勢と拂分け進み出でたるは年
齡十八九才に相成らんといふ氣高き武士足装束と嚴重に致し大
小と横たへ管一文字の笠を左りの手に取り五十ばり相成ら
んといふ供と見えたる武士に荷持と一人連れしが武「ア、コレ」
待てく甲「エ且那何の御用でございます武「貴様達は其の女子
と捕へて何といいたす甲「然うです是ア旅の者で私し共の仲間入と

樋口義勇傳

しませんら仲間入としると申したら錢がねへと云ひますら
其の代りに裏山へ擔ぎ込んで念佛講とするんです武「夫は怪しか
らん事だ見れば身掛りは賤くとも固より左様の事と致せしもの
ではないやうにも思はれるさよ「モ」且那樣さうを御助け遊ばし
まして武「宜しく」其の仲間入といふのは何程かは知らんが是だ
けあつたら宜しうらん云ひつゝ腰の巾着より取出だした金子百
疋武「コレ是と遣はすら免してやれ甲「エ是ア有難うござい升
皆な聞け且那が此の女に代つて金と一分下すつた乙「然うら一分
で此の女と遊すなア詰らねへが武「黙れ其上不承知と申さば切
らまうぞ乙「エー何ともいやアしません大きに有難うござい升
ア皆な来い」口々に禮と陳べ野伏りは退散と致す跡におさよ
は大地へ兩手と突きさよ「有難うございますお蔭さまで危うい所
ると助かりました宮様も紅葉のやうな手と突きさよ「且那様有難う



樋口義勇傳

柔和しく禮儀と陳べた、其方共は生國は何れ是には何の仔細があるやうにも存する身分は何ぢや苦しうない予は上州新田の岩松満次郎ぢや、さよ、ハイ恐れ入りましてござい升貴とき御方さまへ御即答致しましては……満コレ、遠慮するを許すさよ、ハイいろく深い仔細もございませすが、満コレ、佐平貴様が居つては申悪いと見える用があらば呼ぶから遠慮せよ、佐長こまりました、満コレ最早誰れ聞く者もない早く申せさよ、ハイ申上るも恐れ入りましたかと宮澤静馬の身の上、己れ等親子の成行と詳らるに陳べられる満コレ、然らば信州筑間郡宮澤村の郷士静馬のさては、俸であつたの宜しく、萬事予が後見と致して遣はす安心をせよ、さよ、有難うござい升何分宜しく願ひ奉つると親子は涙と流して喜ぶ此の岩松満次郎といふ御方は御先祖は徳川家の御先祖新田大炊介の同族にして將軍家とは御親類筋、幕時分には地行百二十石

樋口義勇傳

にて登城とある時は十萬石の格式格別の御取扱ひ、喜連川左馬之督殿と同様御家柄でありまして其の満次郎殿がおさよ宮松と不便に存じ逗留中御手許へさし置られ様子を見れば、宮松は惻發者、さよよく女子の道と辨まへ居るもの、夫ゆゑ歸國致されても不便と加へて宮松成長の後、敵を討たしてやらんと學問を放へられるに彼れ一と聞て十と悟るの才あり九才に相成りし時は身の丈も外の子供の十二三才位、骨太く肉厚く逞ましき顔色、満宮松貴様に菓子とやらうら宮、ハイ有難うござい升、満其代り只はやらんぞ、是に竹刀があるら遠慮なく予が頭と打て宮、へ長こまりました、満其方が打てば菓子とやるが……宮、へエー打ちませんと下さいません、満然うだ標の掛やうは斯様いたそものだ、袴の股立は此う取れよ鉢巻は此うしてな、竹刀は此う持つもんだと万事教え、其の身は中腰に相成り扇子と取て身構へと致す、宮松正面

より打込んで来る扇を以てあしらひ居る、宮松は菓子欲さに
一心になり打ち込み来るをポン／＼受け流し態と時々一本位
の打たれ、満ッレ菓子とやるぞ、宮有難うござい升繼て物と教える
には授かるもの、方より進んで参るやうにせんければ極めて上
達は致しませんもので忌がるものと無理に感したりあとして
却つて覺えられませぬ宮松は菓子が欲くなるぞ、宮御前様一本願
ひませう、満宜しく、サア来い、ポン／＼、ポン／＼、ポン／＼、中々
此頃は能く受えて来た、昨日と暮れ今日と経ち三年の間教えて居
りました、が今は中腰に相成て居ては稽古束ない位の上に上達を
いたしました、満佐平や宮松は能く受えて来たな、佐左様でござい
ます、此頃では御前彼の爲めに度々菓子と取られますな、満然うち
や、傳エーモン、佐平さんエ、佐傳助何だ、傳、エ、只今眞庭村の先生が
お目通りと願ひます、佐然うの御前樋口先生が見えましたさうで

満ア、十郎左衛門が参つた、是へと申せ、佐長こまりました、暫ら
く経て案内に従がい来りしは年齢五十ばかり、威あつて猛らさ
る人物、是なん關東にて鬼神と云はれし上州眞庭村の郷士眞庭念
流の名人樋口十郎右衛門兼忠といふ先祖は相馬四郎良實、甲州念
流山にて天狗と對手に致し、自然劍術の奥義と悟りしにより念流
と申されしが、子孫上州眞庭村に住居いたせしに依り眞庭念流と
改たられしといふ事、でござい升

第七席

満、十郎左衛門であつたらう久々にて面會といたす相變らず壯
健で満足ぢや、十ハ、恐れ入ります益々御機嫌よく恐悦に存し奉
つる、宮松は禪鉢巻と取り茶とくんで参り、宮お茶とね、喚んあさい
十ハ、いふ存けなう存する。と云ひつゝ、面体を眺めて居りしが、御前
是は宜い御小姓でござい升、満、ウ、宮松兼々申聞した我が爲りには

傳 勇 義 口 樋

武藝の師樋口十郎左衛門といはれる、近附になれ宮ハイ是は先生
初めてお目に懸ります、宮澤宮松と申すもの以來お見知り置
かれ下さいますやう十イヤ御叮嚀の御言葉身共十郎左衛門で
さる、さてキッパリとした良い小兒でござる御前は此の者へ武藝
をお教えでありますか、如何にも武藝と仕込んで遣はすが中々
味とやる幸はい、其方参りしにより一本おしえてやつて呉れ十ハ
、恐れ入りますすが迷惑に存する、満イヤ十郎左衛門此の者は十分
武藝と覺え父の敵と討たんといふ者ぢや身分は云々斯様く、と
物語る十ハ、ア左様でござる、拙者仔細あつて先年信州へ参り
し時宮澤静馬に面會と致しましたが其の後手前にかまけて音信
不通扱は静馬は横死といたしてござる、氣の毒千萬な斯様な悴
と持ちながら、満コレく、樋口太刀筋と見てやつて呉れ、宮松遠
慮すなる一本願ひ、宮ハエ先生御手柔らかに一本願ひ升早くも、

傳 勇 義 口 樋

鉢巻といたし竹刀と取て進む十郎左衛門彼が身の取こなしと見
て居りしが中々法に叶つて居るゆゑ只管感服といたし十ハア遠
慮なく参らつしやいと、操側へ進み中腰になり扇子と取て、是眼に
附る、宮松は竹刀と真甲にふり冠りヤツといふてツカく、と進ん
で参る眼の配り体のこなし、足の踏み方何れも法に叶つて居るゆ
ゑ樋口は此の姿と静馬存生にも見られしなら定めし喜こぶ事と
存じ懐舊の涙に暮れて差俯向く、所ると、エイく、と打込む竹刀の
爲めに思はず頭と打たれ、十ハ参つた……満次郎は満アハ、ハ、ハ、コ
レ老人何故感むれとさつしやる、十イヤ御前宮松の様子と見まし
て思はず感心といたし、雨眼と閉ぢ俯向さし處と打たれましてと
さる、満アハ、ハ、ハ、然う、如何に名人でも目を閉て居ては御儀
は仕へまい就ては御身に頼むが手許へ連れ参つて充分仕込んで
は呉れまい、十ハ、畏こまり奉つる、茲で樋口先生宮松と預あり

樋口義勇傳

眞庭村へ立歸り教授いたされました。が津うも申し上る通り利登の上。に物覺えよく其の上父の敵と討たんといふ心底片時も忘れず晝夜の分ちもなく稽古いたされました。十五才に相成りました時はさすが樋口先生も三本試合の中一本は取られるやうにまで上達。といたし人も驚ろさ我も免す位の話變つておさよは滿次郎殿の親子の命の恩人と思へば忠々しく働らいて居ります。或日大田の宿へ染物と頼みて参りし歸り途向ふの方より來りし乞食手拭ひ持て腕と包みホロ／＼して居る衣類と着て乞モ／＼願ひでござい升一文頂だきたう御座い升、俄の乞食で難儀なもア、可哀想にも思はれしは其の身に愛之のある事ゆゑさよア上ます。と二三文の鳥目録の間より取出だし手渡しと致す、彼の乞食は一文の半分の錢でも快よく呉れる人もないに多分の錢を恵まれし嬉しさに乞有難うござい升と云ひつゝおさよの腕と

樋口義勇傳

見名ヤ、貴方はおさよ様ぢやアございませぬ。おさよ「チヤマア思な人だよ私の名前と何うしてお前は乞ハイ姿形ちが變りましたから見忘れは御尤ども宮松様は御達者です。おさよ「ハイ、チヤア前さんは乞ハイ文藏でございますと手拭取た腕と見てさよ「チヤア文藏のさうして然るゝ姿になんますつた、チヤア御新造は御變りもなく御暮しなさいますか。文其の御新造は自殺となさいました。さよ「エーッ、アノ御自殺と……文「ハイ夫に就ている／＼申上たい事もあります。が此所は人通りが多いゆゑどうか此方へれ出で下さい。さよ「然うです。夫では一緒に参りませう。往來の者は互ひに腕と見合せ様々の噂といたして居り升、文藏先に立ち人里離れし松並木へ來り文「ア、モン和女にお目に掛つたので漸々安心といたしお渡申す品があります。是は御新造様が御果てなさる其の御りお前さんや宮松さんへ手渡しとして呉れん事があつても開封

してはならんと仰しやひました大事の手紙長の年月日本六十餘
州と股に掛け神や佛にお願ひ申せし甲斐あつて此所でお目に懸
るとは誠に嬉しうございますと差出だしたる一通の書翰おさよ
おみちの自叙と承たまはり涙もるきは女子の常目としはたしい
て居られしが「ハイ」文藏との今に初めぬ事とは云ひあがらぬ
前の御親切私等親子は思ひ出してアツとする十三年以前危う
い命と助けて貰ひ申した其上今又然る姿になつてまで御新造
の御手紙と屈けてお呉んあさらうといふて長の年月艱難辛苦仇
や思ふには思ひませんアツてういふ譯あつて御自殺をなさいま
した文此所は往來ゆる精しい事も御話になり兼ねるが今では何方
にお出です「ハイ」近邊の新田村満次郎様の御手許にて御
厄介に相成て居ります文「ハイ」新田満次郎様といへばゑらい御方
其の御屋敷に御亭主でも……「ハイ」とんだ事然んな浮氣はありませ

ん是にも深い仔細のある事鬼もあれ一緒にお連れ申さうと兩人
新田村へ参られるおさよは満次郎へ文藏の己れと尋ね参りし赴
むきと申上げる満「左様お苦しうある此方へ連れ参れ目通りを申
附るさ「ハイ」餘り疎末な身振りを致して居ります「ハイ」然らば
佐平に申して衣服と遣はせ「ハイ」有難うござい升此段佐平へ申入
れ衣服と改ためさせ満次郎殿御前へ連れ参る恐るく文藏平伏
いたしかさよ宮松の御厚情に相成りし事と御禮と申上げおさよ
はおみちより書面と御覽に入れ満次郎は開封いたし暫らく
眺めてあつたが満「さよ」文藏とやら喜こへ道といへるものは通ば
れなる發明の者ちや感服いたす此の書面と見る「ハイ」有難う
ござい升御免と蒙りましてとさよは書面と眺めて居りしが文
藏との御覽なさい敵の行衛の知れないのは尤も……文「ハイ」
見れば今の旦那は先代の旦那と打取りしといふと知らずして養

子に致し我が身と汚されし申譯には敵の片われ九助と打取り
て自殺となされしを然ういふ事とも知らず長の幾月せういふ事
が書てあるかと開封したいは山々あるれを大切に預けられたる書
面ゆゑ宮松様やお前さんとれ尋ね申して居りましたが今日御目
に懸るといふもかみちさまの引合せ「真正に然うでござい升
自分の命と捨て宮松殿に敵と討たしてやらうといふお志さし草
場影で先の旦那もどの位お喜び遊ばして、ございませう
何分御前宜しきやうにお願ひ申上「宜しく、樋口方より宮松
と呼び寄せ一刻も早く本懐と逃げ遣はす文藏其方は長年辛苦と
致せしめゑ定めて勞れもあらん次へ下つて休息いたせ「文有難う
ござい升翌日佐平と眞庭村に遣はせ十郎左衛門宮松の兩人と呼
寄せられ佐平諸共翌日兩人連れ立て参り満次郎へ目通り致し一
通り挨拶終りし時「蒲十郎左衛門長の間其方の骨折にて宮松相

應の腕前に相成りし由子も喜こばしく存する就ては云々新様此
う「いふ次第でも委細の話「ハ、ア左様でござるか御前夫は
何より重畳承たまはつた宮松年來の宿願今こゝ達する場合ぢや
宮へ、年來の御前様の御厚情樋口先生の御丹誠此末宜しく願ひ
奉つる「蒲イヤ子も一刻も早く出立と致さんと存じて居つた、さよ
文藏是へ参つて十郎左衛門に禮と陳へ宮松に面會と致せ、おさよ
文藏は夫へ來り樋口に長の丹誠の禮と陳へ宮松の成長と喜こび
し時樋口は文藏に向ひ「十「授文藏とやらか身に尋ねるが宮澤村の
隣村に横谷村と申すのがあるだらうな文「ハ、左様でござい升お
さよさんの生れた處でござい升「ハ、ア其の村に小野木重助と
いふ者が居やうな「蒲「コレ樋口詰らん事と尋ねすと宜いではあ
る「十「イ、エ重助罷り居らば某し之より御前の御供をいたし宮松と
連れ替馬の逃さるやう致し打取らんの心得「蒲「然うの重助といふ

のは何ぢや、左れば某し若年の砌り武藝修業と致しまして先代宮澤静馬に懇意と結びし節重助にも武藝と教えて道はした事がございます。満成はと夫は丁度宜しい一度其方へ参つて様子と尋ねやうといふンぢや、されば文藏重助は居るだらうな。文、私くし國と出立の砌りまで手習ひ御術兩様と指南いたして居りましてござい升殊に只今の静馬とは至つて懇意でござい升。左様、然らば御前御支度と遊ばせ文藏は跡より参る方が宜らう。文、ハイ畏こまりました。三人の者旅の支度といたし當所と出立いたし信州筑間郡横谷村とさして参る途中にて満次郎のいはれるには、満宮松敵に面會いたした時は猶豫いたさず切て終へよう。如何にも御前の仰しやる通り充分油断なくと教えて日を経て横谷村へ來り、小野木重助の住るを尋ねるに道場と申すはどの指ひにはありませんが手紙にして玄關へ三人立上り、頼む、女

とられ、何方から出でになりました取次に出たのは四十ばかりの女房と見えまして、ア、コレ重助は居られやう。女、ハイ何方様で、イヤ、重助は居るかと申すに、満次郎傍はらより、満宮松面會いたした時は速やめに切ちまへ。宮、委細畏こまりました。女房奇怪の貌色として面會いたした時は切ちまへなど、立派の侍が二人り年若の侍一人、女の御用でございます。ア、コレ真庭村の樋口が参つと告る。女、へ、不承、に奥へ來り、女、お前さん、重、何だ。女、イヤ、イヤ、大變な者が参りましたよ、貴郎の事と重助、と呼捨に致しまして、重、夫が何うしたんだ。女、夫はありなら宜うございます。一人年の若い侍に面會したら切ちまへ、と申して、何でせう。重、ア、何だ、解らんぢやア、あいる名前と聞たる。女、ハイ、真庭の樋口と申しまして五十餘りの人が、重、ウ、真庭の樋口、然る、那方の袴を出さつしやい。女、ア、モ先方は三人でございます。

樋口義勇傳

ら油断があるど切られます重「宜いよ、重助は玄關へ来り樋口の脱
と眺め重「是は何方うと思ひましたら樋口先生能うこゝ御來臨
うの此方へお昇り遊ばして十「是は小野木久々で面會と致した立
話も出来ないのら重「エー恐れ入りました是よ御洗足と持て女房
が持ち來つた温ま湯の遣入りし豊宮松満次郎の足袋束と取り洗
足いたし樋口宮松も共に足と洗ひ案内に従ひ客間へ通られまし
た正面に滿次郎左の方に樋口聊か下つて右の方に宮松何れも一
刀を引附て扣える重助兩手と仕さ重「是は先生いつも御機嫌克
存外の御不沙汰と申上りました能うころお出に相成ました十「ア、
御身もいつも壯健にて大慶に存する…御前此の者小野木重助に
ござりますす滿「左様な重「ハ、先生此の御方は十「されば上州新田
の岩松滿次郎さま重「ハ、ッ是は初めましてお目通り仕り候益々
御機嫌の体を拜し恐悦至極に存し奉つり候私し義小野木重助と

樋口義勇傳

申する無調法者御見知り置られまして御懇命を願ひ奉つる滿「左
様の子は滿次郎ぢや見知り置け、宮松油断なく切らまへ宮「ハ、重
助も奇怪な脱として樋口が十「重助尋公に少々尋ねたい事がござ
る他聞と憚かる事もゑ案内を遠ざけて貰ひたい重「長こまりまし
た良夫の身の上と案じ居る女房と遠ざけし時樋口重助に向ひ十「
さて是に居られる若者と御身存じて居るだらう重「さればさるた
ござつたお見外れ申してござる十「左様な先代宮澤靜馬様と
申せし者重「ウ、然う仰せられれば幼な脱に覺えがある遊ばれ立
派な武士になられました十「夫に就て尋ぬるは餘の義ではないが
當時の宮澤靜馬前名塚田五郎次は息才で居るの重「如何にも無事
でござる十「ハ、貴様と惡意に致すと申すな重「されば別して先代
靜馬よりの惡意でござる十「成はせ其の塚田事は云々是々の惡事
と犯せしもの岩松の御前が御丹誠拙者助太刀といはし敵討とさ

傳勇義口極

せんの心得重へエー是は驚るき入りました左様な悪人ども知らず某し入懇の間ゆる御不審と被むつては恐れ入ります満ア一コレく重助とやら心配とするな五郎次一人の所爲といふのも分つて居る夫には明九月三日十三回忌祥月命日本懐と遠さしたいと樋口も予も存するのぢや其方懇意を幸はひ彼と大井の河原へ呼出し呉れるやう先代静馬の討たれた所にて敵討とさせんと存する夫ども汝静馬と懇意ゆる彼れに助力致すと申すか重イエ何う仕りまして及ばずながら私し義も宮松殿に力と添えるでござらう十左様の宮松喜こべ重助も其方に助力いたすと申す宮ハツ千万忝けなく何分宜しく頼み存する重委細承知致してござる何は兎もあれ御休息と願いたうござる。是より女房に申附け残る方なき町噂に扱はれる其夜は三人小野木方へ止宿いたす重助よりは静馬方へ明日疎酒一献とさし上た江戶表より珍物到来い

傳勇義口極

たせしに依り御來臨と乞ふといふ書面と遣はし静馬事前名五郎次は我が悪事露顯とも知らず忝けなき赴むと相違なく推参いたすよし返書と遣はされました愈よ大井の川原で敵討の一席

第八席

悪盛んの時には天に克ち天定まつて悪亡ぶ頃しも寛永九年九月三日先代静馬の討たれし大井の川原庚申堂に満次郎十郎左衛門は宮松に充分支度とさせ重助と案内といたし五郎次の来ると遅しと相待て居られる斯とは知らず只一人悠々と来りし静馬重助早くも聲と掛け重是はく宮澤氏でござつた。静チー小野木氏昨日は忝けなき御書面御約束の如く只今推参いたす所御出迎ひでは恐れ入る重イー御出迎ひは致さん尊公に尋ねたき事有之静ハア如何なる事とござる重されば今と距る事十三年前元和六年九月三日當所に於て先代宮澤静馬と手に掛けて二字國俊の

樋口義勇傳

一刀を奪ひ取り其の後巖禪寺の召使ひ九助の討らひを以て宮澤家へ養子に参られ長年榮耀に暮せしが天罰に報ひし事と覺悟いたされて宜しうキヨツと致せしが大膽な五郎次色にも出さず靜是はしたり尊公は狂氣いたされしか某し身に取て聊さる覺えのない事、戯むれも時に據るもの聞くも中々汚らはしく存ずる滿次郎進み出で滿次郎五郎次とやら己れが爲したる悪事此方には証據澤山あり現在汝に欺むるれし貞操節義なみちの自殺は其の九助とやらを自白に依り先代靜馬の敵と宮松に討たせんとて九助と殺して文藏に委細と書て書置と持たせ遣はしたる証據は充分予と何と心得る上州新田の岩松滿次郎ちや靜一や假令貴所が如何なる御人かは知らずと雖も身に取て覺えのあゝ事とさざる滿云ふな、さばかり潔白の汝が罪科もあゝさよ宮松と何で先年殺さうと致した、第一汝が腰に帯たる劍は確るに先代

樋口義勇傳

靜馬の差料二字國俊が確るの証據靜一、此時宮松進み出で如何に五郎次汝我を忘れし、先代靜馬の遺子宮澤宮松新田の御前の御厚情樋口先生の御教授に預り俱不戴天の父の敵汝と討たんと長年月艱難苦勞の甲斐あつて今ころ晴す父の忘執卑法未練の會譯致さんより快よく尋常の勝負に及べと棒十字に絞取り白布疊んで鉢巻るし岩松の君より申受し城四郎信國の一刀の鞘を携て進み出る、十郎左衛門大音に十如何に五郎次とやら拙者は眞庭村の樋口十郎左衛門なり門人宮松の助太刀いたさんと参つたり尋常の勝負に及べとスカ、と一刀の柄に手を懸け進み出る、滿次郎重助も其々柄に手懸け進まれる今は逃れぬ場合と心得靜は汝等の爲に討られし、斯く相成れば何との包まん某し靜馬の妻みちへ懸幕といたし、靜馬と討ち取りしに相違なし高の知れたる若年の宮松返り討に致して呉れん、ア来い來れと草

樋口義勇傳

八十二
廢と脱ぎ捨て手早く袴の股立と取り上げ下袴を取て袴となし手
拭懸んで鉢巻いたし二字國俊の一刀の鞘と拂ひ寄らば切らんと
身構へに及ぶ宮松は下段に取てワッ／＼と進み、ヤ、ッといつ
て互ひに氣合と伺がい暫しの間睨み合てあつたりしが五郎次聊
さる急き込み正面より風と巻て切り下したる一刀、宮松心得たり
と物打際にてガツ／＼受留り是より兩人右と討てば左りに交し
左りと打てば右へ拂い前にあると思へば後るに現はれ上段下
段虚々實々秘術と盡し千變万化の手練と振ひ暫らく打合てあり
しが宮松の腕前勝りしる疊み掛て切り込む一刀五郎次受太刀と
相成りマヂ／＼と引下るとマヂ／＼たりと踏込んだ宮松、エ
ッ、一聲叫んで切り込む一刀受るも引くも出来ればころ左りの肩
口より右の乳の下掛て切て落す、アッといつて倒れると起しも立
す乗しゝり咽喉と貫ぬき首アツ／＼切切り左りの手に首と持

樋口義勇傳

ち右の手に一刀と後ろに隠し、ハッ／＼と平伏いたす滿次郎扇と開
き適ばれあり宮松退がは樋口が仕込みの腕前満足の至りぢや十一
チ一宮松適ばれ威服黄泉にて先代静馬みちとやらも定めし喜こ
びし事ならん宮ハ、ッ御賞美に預あり恐れ入り候、是と申すも御
前様の御恩先生の御骨折、嗚や父初めおみち喜こふ事とございま
せやう重助も傍はらより宮松の功名と賞めそやし居る處へッ
イ／＼といふ百姓衆、ヤア大變だ宮澤の旦那が殺された御役元が
討たれた早く此の事を宮澤家へ申入ると騒ぎ立ち、十郎左衛門は
宮松の刀と拭はせ鞘にかさめさせ扣えて居る處へ宮澤家より
の注進により代官勝田文太夫下役八大勢と連れ来られしと滿次
郎一同を制し文太夫へ我が身分并に宮松仇討の事と申入る、幸は
いなる哉、後れ走せて文藏おさよも来り先代宮澤静馬の討たれし
其節の事と逐一申上る當所は松平丹波守領分にて前申上た代官

傳勇義口極

文太夫滿次郎の御言葉といひさよ文藏の申上たる事等とよく聞き記し、一度は滿次郎初め十郎左衛門宮松おさよ文藏重助に至るまで代官所へ召連れ滿次郎は別して町噺に取扱ひ宮澤村百姓代等と呼出し段々取調べし處相違なきに依り一同の者揃ひなし巖禪寺の寶山和尚は先年病死いたせしに依り當時の住職も宮澤家は宮松に下される。滿次郎と初め一同宮澤の家へ参り夫々知己と招いで喜こびの酒盛尤とも五郎次は一度は養子に致せし事ゆゑ死骸は巖禪寺へ葬むり遣はす宮松は片田舎の宮澤村にて朽る果んことと如何にも残念に存じ滿次郎十郎左衛門と相談の上文藏さよの兩人と改ためて夫婦に致し其の身は武藏と以て天下に名前と揚んといふ望み、岩松樋口小野木の人々其の志ざしと感心いたしさよ文藏へ此段と申入ると兩人強て辭退に及びしが様々言葉と盡し勤められ餘義なく承知いたし村人々招ぎ滿次郎より

傳勇義口極

此段と申入れしに誰一人不承知の者もなく茲に相談首尾よくまどまり婚姻の式と舉げめで度く相濟めば重助にも万事禮と陳べ當所と出立いたし滿次郎十郎左衛門宮松は一度は新田へ参り夫より十郎左衛門宮松と連れ眞庭村へ歸られる、此の十郎左衛門は當年十三才に相成る十次郎と申す倅がありません事思ひも寄らず夫て我が跡式と譲り武藏と以て世と立てさせん事思ひも寄らず夫に引替へ宮松の腕前凡人の及ぶ所にあらず未頼もしき心掛け我が家の養子に致さんと妻あきにも相談致せしに是も大ひに喜こびしゆゑ改ためて滿次郎へ此段と申上る滿次郎殊の外喜こび左様相成る時は双方の爲ありとて自ら親許に相成り宮松を樋口方の養子といたし名前と十三郎義忠と改ためました、十三郎は父母へ仕へて孝心、舍弟十次郎と勞はり門弟一同へ劍術を町噺に教えれば一同も若先生くと尊敬いたし眞庭の小天狗と擧つて

譽めろやし遅々武藝も上達十七才の節は極意習傳に相成りしが
母親お秋には表面こそ十三郎を寵しむとはいへど内心には悴十
次郎のあるものを十三郎の爲に當家と乗取られる事はと發明の
やうでも女子の愚痴些のな事にも長夫が留守の其節は荒い言葉
と述べる事もありますが只ハイと更に其の意に逆らはず豆
やりに十三郎事へ居れば如何にもする事叶はず十郎左衛門は近
々家督と譲らんと申して居られる頃しも六月中旬の事、今日は稽
古も早く終い十三郎は母の前へ参り十さて母様私しは兒玉川へ
参りお父上お戻りに相成りました時御酒を召上る御肴と取て参
らうと心得ます秋ア然うへ緩くり行てお出で次エーモッお
兄上様私もお供と致します秋コレ十次郎やお前は御止しる
さい次イエ阿母さん是非私しも参りたうござい升秋危ないら
止しなさいといふに次大丈夫でござい升、どう御兄様御一緒に

お連れ下さいましたし母上十次郎が斯様申ますら心附けまして
連れて参りませう秋然うへ何分頼むよ十ハイ往て参じます。兩
人は釣道具と持ち兒玉川と申を山川へ來り頻りに釣を垂て居ら
れる母親は犬上豪八といふ内門弟と呼び秋豪八や豪ハイ何の御
用でござい升秋お前に尋ねたい事があるが何日ぞや名主の菊池
殿の娘お糸さんと賞てお出だつたねへ豪へ、へ、何でござい
ますの秋イヤサお前が熱心なら私が万事周旋で夫婦にして上や
うの豪エーッ夫は恐れ入りましたな、然うなりませすれば此上もな
い僥倖で秋其の代り私が頼むことがあるが聞てお呉れる豪へア
如何なる御用でも相勤めます秋然らばお前へ頼むが悴十三郎只
今兒玉川へ釣に参りましたら人知れず殺してお呉れではない
の豪エーッ那の若先生をどういふ譯で秋是さ、十三郎があつては
私が腹と痛めた十次郎一生運木に相成るではあるの豪へエー御

第九席

尤どもではござるが若先生は中々容易には討てません 秋「然うのへ夫なればお前は頼まん外に幾らも利右衛門殿の娘お糸坊の類になりたがつて居る者もあるら 豪「エーモ、若先生を討んければ婿さんにやアあれないンです 秋「然うさ 豪「へエ宜しうござい升何どの工風と致して討ち取て参りませう其代り今のお話はい間違ひのあいやうに秋「承知しましたれ前も決して人に悟られないやうに 豪「エー大丈夫でございます。性來愚ろしい犬上豪八支度いたして十三郎と討たんと兒玉川と差して参りました

君子は釣して網せず狩して寝鳥と取らずといはれましたが釣は至つて面白みがあるもので十三郎舎弟と共に餘念もなく釣と致して最早七ツ下りに相成る頃日と昏負ふて居る處へ犬上豪八手拭で顔と包み六尺もあらんといふ竹の先さへ短刀と結び附け

堤の上より川端に居る十三郎の後ろの方へ忍び寄り来る十三郎は水面に映る怪しき姿に傍はらより十次郎 次「モ、お兄い様何の参りましてござい升 十「イヤ捨置つしやい次夫でも後ろらら……十「コレ、宜しいと申すに。豪八は固より愚ろの奴ゆる我が妻の水面に寫るのは心附すマカ、と進み寄り、エーと一聲さけんで突掛つたる槍先さ兼て覺悟いたせし十三郎ヒラ、と体をうわし、と進み出でたる豪八の腰の邊りと健たりに打たれた事ゆゑモ、ド、ド、ド、打てド、ド、ド、水玉上げて兒玉川へ真逆さまに飛込む固より流れの早い山川の事も、ド、ド、ド、川下の方へ押流される 次「お兄いさん何でございませう 十「イヤ宜しい此事は誰にも申してはならんぞ 次「ハイ承知しました 十「最早立戻りませうとびくへ入れたる魚と持ち道具と片附け歸宅といたし 十「只今戻りました 秋「イヤお戻りか魚が獲れましたら 十「ハイお父上の御夕飯のお魚だ

樋口義勇傳

けは取て参じました秋然うへ定めし空腹であらうら御飯と
か上んるさい母親は豪八は歸らず十三郎別條なく歸りしゆ不
審に思はれしが去あらぬ体にて兩人に食事とさせる。十郎左衛門
歸宅いたし兄弟の取て参りし魚にて酒と呑み殊の外喜こばれ休
息といたす豪八は二三丁押流されしが漸々に這ひ上り、日のある
中は世間とね夜分に相成り歸宅いたし衣服と改ため素知らぬ
貌と致して居りしが何となく心配ゆる十三郎の居間へ來り豪若
先生今晚は「十」豪八の此方へね這入りお茶が這入たからか上
んなさい豪有難うござい升別段十三郎立腹の様子もあく愈よ海
氣味悪く十次郎が酌んで出す茶と飲みながら豪若先生今日はお
魚は澤山とれました「十」ハイ多分取れましたよ夫にね面白い魚
が獲れやうとしたと獲積なつたが餘はと大きいつた豪へ「エ」ど
んなのです「十」されば魚は水の中に居るのは當然だが堤の上ら

樋口義勇傳

來たの「豪」へ「エ」夫ア不思議です、何てエ魚でせう「十」左様は何
と名と附るの「十」十次郎「次」左様ですお兄い様の後らるら棒と持
て突て掛つた豪へ「エ」妙な魚があるもので、夫が何うしました「十」
されば拙者が釣と垂て居る後らるら感ひれたら或は乃公と殺さ
うといふ了見の槍のやうなもの持て來たのだが日と春食て居
るから水面へ姿が寫るのに氣の附ん所と見れば餘はと愚の奴
だと思える豪成る程夫が何うしました「十」拙者は扱は何うしに來
たと思ふら油断とせず居ると果して突掛つて來た体とらば
して水中へ投込んでやつたが死ぬ氣遣ひはならうが二三十里
押流れたに違ひないア「ハ」ハ、ハ、馬鹿な奴があるもので豪然う
ですなア貴郎に何で肝ふものでございませう大方申藏でもしや
うとしたんでせう「十」「ハ」ハ、ハ、豪八お前貌と何うしたエ大尉
怪我としたぢやアないら、夫に髪が毛が濡て居るねへ「エ」一すし

樋口義勇傳

た事で水よりよりました。次「お兄いさん其の魚は奈八のやうでございませう、先づ御休みなさい。奈八は赤面として已れが部屋へ引取られました。其の後母親お秋は十三郎といよ、亡きもの致さうと何れで求めし毒薬と食事の中へ入れしと十次郎は早くも悟り兄十三郎食事の節は己れが勝部と引換んといたすが舎弟の志さしと不便に存じ此儘致して置く時は己れら舎弟の毒殺に遇うに違ひない、父へ此の話と致さば家の耻辱に事る當家の家督と舎弟に譲らんには勘當でもされんければ家督除きになれんと存じ心にもなき放蕩に身と持ち崩し玉村、新町、木崎、板鼻、安中などいふ宿へ参り飯盛遊女と對手に致し都合によれば三四日も戻らざる事もあるお秋は十三郎の放蕩を幸はひいつる離縁といたした方が宜らんとさま、十郎左衛門へ申入れる十郎左衛門。

樋口義勇傳

は斯様な事は若い者に有り勝の事其の中心も直るであらうと勘辨はして置くやうなものを、追々募る不身持の爲めに大きに心配いたし當人と呼寄せ意見と加へれば、十誠に恐れ入りました、以來改心いたしますといふ其の晩も遊びに参り歸宅せず餘義なく此の事と岩松、滿次郎へ申上げ十三郎へ御意見下さるやうにと頼まれる。滿次郎立腹いたし、滿怪からん奴だ、恥度拙者が改心とするやうにさして遣はすと十郎左衛門と歸し十三郎と呼寄せ、滿「コレ」前へ出る。十是は暫らく拜顔と仕つらず益々御機嫌の体を拜し、恐悦に存じませる。滿「コレ」辭義は宜しい其方以前の身分と忘れはし、まい母さまと共に已に乞食にも相成らんとせると予が情と以て一人前の武者に致し、實父の敵と討ち樋口方へ養子になり若先生どの小天狗も申されるは誰か思ぢや、皆予と十郎左衛門の骨折ではない、承たまはれば近頃放蕩に身と持ち崩し玉村、新町の

樋口義勇傳

飯盛女の爲めに心と奪はれし樋口が度々意見と致しても更に改心の様子がなないと、以來恥度改心いたさば宜しきもなき時に、は當家出入は差留め樋口の方は離縁に相成るであらう、多氣者ゆゑ十、恐れながら私し義毎夜放蕩と仕つるも、義家の爲め我が一身の無事と計らはんが爲めでござる、左様致して見れば遊び居りまするも至つて大儀のものでござい升、満、黙れ遊び居るのが大儀だ樋口の爲たの一身の無事と計らふ遊女と買て何が左様、事がある十、ハ、イ、邊りに、人も居りません、申上ます、が實は母親云々、斯様く、で私し危うい事度々、夫ゆる放蕩のやうに見せ實は遊女買あどは、ホンの一度、二度跡は、人知れず、門人の方へ止宿いたし、又は山中へ参り、堂宮へ泊り、片時も武藝の事は怠たる氣遣ひは、ございません、滿、ウ、其の方が涙と流しての、只今の一言は、よも偽はりではあるまい、不便のものぢや、表向に致さば父の耻、義理ある母

樋口義勇傳

へ孝行の爲め家督除きとされんといふ心得にて遊ぶとあらば子、が免す、併し勘當いたされた後如何いたす心得ぢや、十、されば日本六十餘州、武藝修行と致さんの心得に御座います、滿、成はば、末頼母しい、心底表向き遊ぶと見せ、おけ予が方へ泊りに参れ、十、有難い仕合せにござい、升、十三郎、愈よ、放蕩に見せ掛し、おゑ、十郎、左衛門、餘義なく、勘當いたし、度々趣むき、滿次郎へ申上げる、滿次郎も一旦は勘當いたせし方が、當人の爲めならんと御承知に相成りましたら、終に十三郎、勘當に相成る、當分、岩松方に居りしが、出立いたし、度々趣むきと申上げ、滿次郎は、旅の支度、路用の手當、充分にいたし、遣はし、滿、十三郎、其方何れへ参つても、予が舍弟、同様のものと申す時は、決して天下の諸侯、侮むる氣遣ひもあるまい、金子、不自由の節は、此方へ申來れ、爲替に致して、送つて得させん、十、誠、に有難き御言葉、何分宜きな、に願ひ奉つる、夫に、老年の父母、若年の舍弟の身の上、随分

樋口義勇傳

お目掛け下し置られるやうにと万事と頼み新田と出立いたし泊りて重ね蔵宿にて七ツ頃はひに相成りしゆる宿らんとは思ひしが成べくは今宵の中に江戸表へ参らんと戸田の川原へさし掛つて参りし時は日はパツタリと暮れ幸はひの月明火急いで来る向ふに何やら人の居る様子合點行ると見てあれば見上るやうな三人町人体の男と捕へ已に懐中物と奪ひ取らんといたす町人はやらじと争うつて居る様子義に走る十三郎ハアアと馳け来り物ともいはす一人の悪者と二間ばり向ふの方へもんどり打て投げ附け廻りの二人が之と見て「ヤイ何としゃアがるんだ十一黙れ見受る所汝等は道中の胡摩の繩の或は追落しの類ひあらん義に依て我れ此の町人の危難と救ふ」何と餘計事としやアがるな汝ら先へ廻んで終ふと打込み来る刀の下と撲いく、り一聲叫ぶと見えたりしが那方の方へ投げ附たり味とやるると今一人

樋口義勇傳

切り込み来るや体と開き是も向ふへ投げ出だし、刀の柄へ手と掛る「己れ等是にも懲りすば一刀に打取て呉れんと身掛まへし様子と見て叶はじと心得しる通々の体にて三人共に投げ出だそ、十三郎町人に向ひ「十」コレ怪我はなつた町「ハ」有難うございませした危うい所をお助け下さいまして御禮は嗣には盡されません「十」イヤ、左様禮にも及ばん貴様何處へ行んだ町「ハ」私しは江戸大傳馬町木綿問屋丹波屋甚兵衛の手代吉藏と申まする者主人の金子と預りまして運くはありましたが今晚の中に賭宅と致したく心得まして急いで参る所「ア」三人に出逢ひ已に懐中物と奪はれやうと致しました「十」然うら夫は近頃物騒る幸はひ拙者も江戸表へ参る者ゆゑ同道といたして遣はさう町「ハ」有難うございませした何分宜しく願ひたうござい升是より兩人打連れ渡しと越して板橋宿より江戸大傳馬町の丹波屋方へ参りしが吉藏よ

種口義勇傳

り主人甚兵衛へ己れが危うき所と助けられし恩人十三郎の話
いたせば甚兵衛殊の外親切と喜び無理に勤めて其夜は己れが
家へ留め馳走といたし段々身の上と承たまはれば武藝修行の侍
當分江戸表へ逗留のよし夫ゆる滞在在中は我が家へ止宿いたされ
ん事と親切に申入る十三郎甚兵衛の方に足と留め日々江戸表と
見物いたす將軍の御膝元として其の繁昌云はん方も多く大手の横
子大名小路四ッ谷赤坂麹町上野淺草金龍山芝三縁山増上寺と諸
方と徘徊いたし今日は愛宕山延福寺へ参り將軍地蔵と拜し四方
の景色と見てあれば前は渺々たる品川の海邊より向ふは安房上
總と一目に眺め江戸市中七分通りは見える所ゆゑア、宜い景色
ぢやと傍はらの茶店に腰と打掛け年頃十七八の婦人と對手に話
として居る所へ女坂の方より上り來りし職人休の若い男二人
り一人は豆絞りの手拭で向ふ鉢巻出刃庖丁とかつ取り男阿魔汝

種口義勇傳

が命は貰つて終つた覺悟としるど茶見世の女と望んで飛掛らん
とする是と見るより女は女とぞうぞ且那樣お助け下さりませ十三
郎の後ろの處へ來りブル／＼ふるへて居る様子男モ／＼且那
其の女と此方へ出してお呉んないさ重ねて置て四ッにしなきや
ア男の一分が立たねんだ十コレ町人何だ男エ、お前さんが
知てる事ぢやアねへ出してお呉んなせエ十イヤ窮鳥懐るに入る
時は獵師も是と助けるといふ況んや万物の長たる人間何の譯だ
の話しして見る男モ打捨といてお呉んなせエ阿魔ア出る十イヤ
何うしたんだ男ヘエ、夫ぢやアお話しませう私しやア櫻田備
前町の左官の松五郎といふ者です其の女は私が女房なんで、所が
經師屋の辰藏といふ朋友と間男としやアがつたんだ、夫もあ命と
取らまうんです十ウ、夫ア怪あらん事だコレ、此様アノ者
の方へ嫁に参つたの女、イーエ然んな譯ぢやアあいですッ

樋口義勇傳

懇ろにい致しましたが別して夫婦といふ譯でもないのです。十、
、ア、マ見れば馴染て居ただけの事たる、町人今聞けば改ためて
夫婦の盃とした譯ではあるさうだ。松、エ、夫にやア逢へねへが
私が女房にならうとて、成ほど貴様の立腹は尤もだが
尋者が仲才といたす乃公に任せる其方の男は立てやる松、エ有
難うござい升、兼何うしたもんだ。兼、然うよ旦那が口と聞てお呉ん
なさる、だのらお任せ申しねへな。松、然うの宜い據梅にお願う申
ます。十、流石は江戸子、能く分る男だ。ホンの少々だが手切金と遣は
さう。松、どうも濟ませんな、兼お禮と申して呉れ。兼、エ、モ、私しや
ア辰の友達、大工の兼吉で、エもんです。いろく、御心配に預りま
して相濟ません。十、ア、宜しく、是は輕少だがホンの印だ取て置
け紙にくるんで差出だすと。松、エ、何うも有難うござい升とん
だ御散財と掛ました、いひつゝ紙と開みて。松、モ、旦那是は幾らあ

樋口義勇傳

るんです。十、されば鳥目二百文。松、モ、申儀いつちやア行ねへ
昔のら間夫相場は七兩二分二百たアひさいちやアねへ。十、ナ、
不足と申すか。松、エ、不足たつて餘まりひさいちやアござせんら
十、囁けた事といへ、貴様も立派の男子ちやアないら、ホンの趣意は
へ立てば男の一分は立つものだ。多少と論ずる事があるら。松、エ、
夫だけれども。十、ナ、不降なことをいふな、傍ら兼吉が。兼、松
返しちまへ江戸子の面汚した、ア、二百の手切たア聞た事がねへ
や手前も安い野郎だ。松、當り前だ。エ、モ、旦那是つアお返し申す
女と此方へ出してお呉んなせ。十、扣えろ一旦拙者へ仲裁と願ん
で置ながら今に至つて變換いたすどあらば此方武士の一分が立
ん此上は拙者が相手だ。尋常の勝負といたすど一刀の柄前に手と
懸る。松、モ、少し待てお呉んなせ。エ、氣が早エちやアねへ。兼、
圖よりだ。ア、来い。松、ア、何も勘辨としねへたア云ひません。十、

樋口義勇傳

然うであらう然らば宜しい否やはない松へニ宜うがアす十
成るはど流石は江戸子、感心と致した迄はれの者だ松へニ上たり
下たりしつこるしやう十コレ宜しひとあるなれば以來當人へ
申分のあい書附と出だせ貴様夫で勘辨としたらまだ宜いのち
や夫婦といふ者は親の許しと受け人別を我が家へ引取らんけれ
ば夫婦とは云えん夫と間夫など、申すは筋違ひ、宜い松へニ畏
こまりました、アヌが書附にやア及びません十イヤ成るん書附を
よこさんければ異存があるんだらう面倒だら勝負の方にしや
う十「アお待なさい困つたなア兼何うしたもんだ兼何といやア
がるんだ二百の手切で書附と取られて耐るものゝ十「扣える貴様
朋友の分として當人出さんと申しても勤めて出させるが今日朋
友の情ぢや、故障と申さば汝が相手だぞ兼「エー何ともいやアしま
せん松出しちまいねへ松「ウ、且那何と書んで十「夫は乃公が書て

樋口義勇傳

やる鼻紙と取出だし硯と借り「ア」と認ため是へ兩人の姓名
と自身に書らせ爪印と捺させる、兩人は不承「く」に引取て参る、女
は大ひに喜こび禮と陳べて居る所へ五十餘りの親父來り親お
花「ハイ親父さん何です親何ですぢやアないッ聞けば左官の松
と大工の兼が貴様が間夫としたと、いつて殺しに來たとかいふ
話し何うした花「ハイ此の且那様が被爲入て漸々二人を逐拂つて
お呉なさいました親「然うら、モン且那様私しは是の親父、治兵衛と
申しますもの誠に有難う存じました十「ア、然うかへ娘の不義と
致すも年若とはいへお前の不取締りもあるから以來氣と附るが
宜い親「へニ私しは此の櫻田兼房町に住つて居りますすが毎日木挽
町の柳生様御門前へ飴菓子と商なひに参ります娘は此れへ茶見
世を出さして置ますすがイヤモ、至つて尻の軽い女で毎月此うい
ふ事が二三度位はあるので其度々に手切れと取られ難達とい

樋口義勇傳

たしますす、十ハ一夫はせうも論外ぢや、今度はお前の娘も懲りた様子だ、おら跡は大丈夫だらう、夫に今の兩人より拙者跡々の爲がある、おら申分ないといふ書附を取といた、コレ娘年老た親父に以來苦勞はさせん方が宜いせ親へ、且那有難うございましてお花見世と片附て……且那樣見苦しい家ではございましてがお禮と申上たうございまして、一寸お立寄り下さいまし、十イヤ、梅はつしやるな、花、イ、エ、且那樣親父もアノやうに申ます、おら強てお出で願ひますと親子に勸められ、館屋治兵衛方へ立寄りしが縁とあり十三郎木挽町九丁目將軍家、御指南役、柳生飛彈守屋敷へ入り込み、柳生流の片眼、外しの精眼といふ術と終りの一席

第十席

叔十三郎は治兵衛に金子十五兩と遣はし、館菓子道具と一切引取り、治兵衛の甥、治郎吉と偽はり、日々兼房町より木挽町柳生家門

樋口義勇傳

前へ参り、商なひと致して居る、至つて愛敬のある男ゆゑ大勢の門人衆を關番門番等には就て愛せられ、家中の子供も遊びに盡ると、館菓子と遣はし、遅々懇意になり、折々御道場の様子と驚るが、ら拜見と致して居る、或る日、甲、治郎吉や、貴様大層、御術が嗜だ、な面白、い、十、エ、面白、い、所ぢやア、ございませぬ、皆様方の御稽古と拜見として居ると、私くしも一本やつて見たくなす、甲、然うか、幸はひ、御前は、未だ、御下城には、ならず、此方へ、通入、ん、な、さい、一本、教、え、て、やら、う、乙、サ、イ、中、村、申、職、といひ、な、さん、商、人、を、捕、へ、て、左、様、の、事、と、致、した、と、知、れ、ば、面、倒、に、あ、る、だ、ら、う、甲、サ、ア、長、い、事、ぢや、ア、なし、少、々、位、あ、る、ら、大、丈、夫、だ、乙、夫、で、も、丸、腰、で、居、た、ら、若、流、し、で、は、町、人、といふ、事、が、直、ぐ、知、れ、る、ぢや、ア、あ、い、る、甲、成、は、ど、是、ア、困、た、る、宜、し、く、御、立、關、番、番、ハ、イ、中、村、さん、何、の、御、用、で、す、う、甲、外、ぢや、ア、ない、が、ね、尊、公、の、袴、と、少、々、此、の、治、郎、吉、に、貸、し、て、や、つ、て、お、呉、れ、番、ハ、エ、一、何

樋口義勇傳

の手をヒッリ、名人の樋口十三郎に打たれた事も、竹刀を取落し
甲「驚つた……是ア不思議だ」
十「恐れ入りしました」
甲「さうして氣用の性
だモ、一本來い」
十「へ、小手と御用心」
甲「馬鹿といへ小敵と見て侮
むつたらら打たれた」
此度は大丈夫、ヤ、ッ、と再び身構へ
いたす、ヤ、ッ、と打ち込ひ、竹刀の爲めに再び小手とヒッ
甲「驚つ
た」
十「へ、へ、へ、失禮」
乙「ナイ」
中村何てエ事とするんだ、
ア拙者だ、治郎吉遠慮とするな」
十「へ、エ、太田さんですな、御小手と
御用心」
乙「大丈夫だ、是又互ひに身構へて致せしが以前の如く、小手
と打たれ入れ替つた」
門弟七八人我も乃公もと出たが三本と合せ
る者も、折しも柳生家大番役と勤める總斗米嘉兵衛何時の間に
も來り此の様子を見てありしが、嘉「アイヤ各々暫らく待つしやい
甲「ハイ、是は總斗米先生」
嘉「イヤ何と殿ひれを致して居られる其の
者は、ツイア見た事があるが何者だ」
甲「ハイ、お叱りでは恐れ入りま

樋口義勇傳

すが門前に商なひと致して居る治郎吉と申します者、武藝熱心
にて強て一本教へて貰いたいと申ましたら、嘉「ハア各々が教え
られるら、此の者へ教へるのら」
甲「是は御詞では恐れ入り升我々が
教え遣はします」
嘉「黙んなさい各々が教える腕ではない治郎吉と
申すのら、乃公は總斗米嘉兵衛だ」
十「ハッ、恐れ入りしました、治郎吉と申
す不調法者でござい升、どうら御勘辨と」
嘉「ナニ別段詫るに及ばん
中々感心る心掛け、嘉兵衛一本對手と致す遠慮なく來さつしやい
十「ハイ、有難い仕合せに御座い升、御手軟らに願ひたうございま
す、双方支度いたし」
十「と進まれる、總斗米は片目外しの精眼
に附け十三郎は、真庭念流の大中、劔に身構へて致す互ひに一呼一
吸、と斗りヤ、ッ、ヤ、ッ、と貌と見合して居りしが、双方透のあ事
と見え、小半時ばかり白眼合て居る中、嘉兵衛小鬘の邊りより、マ
と汗とだす、門人一同は呆氣に取られ、此の勝負如何にあらん

樋口義勇傳

と手に汗と握つて扣えて居る所へ間の杉戸と押開き、宗、双方共に待て、一同アツと驚るる振向て見れば、何時の間にも下城になりし柳生飛騨守宗冬、袴十字に綾取り白綾、疊んで鉢巻なし、袴の股立と取上げ、脇差と帯し、加賀の清満の鎧へ上げし刀と左りの手に引提げ、宗如何に夫なる者姓名は何と申す姿と替へ名前を偽はり我が流名と奪ひに参りし者に相違あるまい尋常に本名と名乗れ十三郎は竹刀と投捨て、袴鉢巻と取り跡へ下つて兩手と仕へ、ハッ、御眼力恐れ入り奉つり候、只今に至り何と隠し申さん某し義は上州真庭村の郷士樋口十郎左衛門、倅十三郎義忠と申し候上州新田の領主岩松満次郎様の仰せに依り、柳生流御教導と願はんとは存せしが、其の手續さと致す事叶はず、蔭ながら御稽古拜見と致して居りました、今日は如何なる吉日の御門入衆に誘ふはれ御道場をとくと拜見いたさんとしたる所、御目障りに相成り恐れ

樋口義勇傳

入り奉つる、ア、扱は其方新田の満次郎殿の詞に依て参りしとあらば、苦しうあい予と諸共に参れ、ハ、ア、上意有難く存じ奉つる仰せに従がひ、宗冬の御跡より御居間へ参られ、改めて御目通り柳生殿は十三郎の腕前と御試しに相成ると適ばれなる武藝治兵衛方と引拂はせ、御自分御手許に於て充分仕込まれる、十三郎は此段岩松満次郎へ背面と以て申上し、ゆる満次郎殊の外喜こび、何分相願ひといふ返書到来に及ぶ、昨日今日と思ふ中に早や一ヶ年はあり、柳生家にて修業いたせし十三郎片目外しの精眼まで授けられる、此段を承たまはりし満次郎急に江戸表へ出府いたし、阿部豊後守忠秋屋敷へ御到着に相成る、是は例年参勤と致す時は阿部家へ逗留といたすが、例に相成て居る將軍御目通りも相済み、柳生家へ参られ、飛騨守へ面會十三郎取立てに與ありし事と厚く謝せられ、十三郎には改ためて御會いに相成り、夫より十三郎御機嫌伺が

いに參られる満次郎殊の外喜こびの体にて満十三郎其方の腕前
飛驒守より承たまりしが彌々上達といたせし趣むき真庭念流に
は矢留の術といふのがあるも承たまはつたが左様の十尊命の如
く大中劔矢留と申するのがござい升満ウー其方存じて居るの
十されば先年父より授けられ候満夫は幸はいの事ぢや最早江戸
表に其方も長く居らんより百聞一見に如かず諸國と修行いたし
たるら予も充分手當としてやりたいが知ての通り勝手元不如意
の事も心任せず幸はい諸侯方へ相頼み弓術に名と得し者
一人ツ、借り受け其方と試合とさせるも申したら定めし喜こん
で諸侯承知いたすぢやらう十ハッ有難く存じ候へども莫大なる
入用先刻の仰せに御勝手元御不如意と...満コレ夫が此方の
手ぢや諸侯と招けば誰一人素手で參る者はないワ、さすれば其方
の路用位は出来るであらうと心得る十是は恐れ入りました御

計略満アハ、先年大久保彦左衛門が將軍家日光御社參の御
供と願ひ御勝候と諸侯へ配り多分の金と得し事と思ひ出だし斯
様致さんと存する十何分宜しく願ひ奉つる。満次郎は豊後守へ此
段申入れ有馬玄蕃頭殿とは別段御懇意の間も云々斯様の事に
は其許馬見所と拜借いたし度き趣むきと御頼みになる、玄蕃頭
いとより見い御頼み委細承知いたして御座る満早速御承知千万
番しけなうござる諸侯見えられた時赤飯の一盃位は遣はさん
ければあるまいら其の義も序でに御承知と願ふ幸ハ宜しい
万事承知いたした安い事とござる、賊に些細のやうだが二百六十
餘大名大勢供方と連れてた出でに相成るを主人はあり御馳走も
出来ず家來一同に出す事になれば大した入用、玄蕃頭は最とより
安いと仰しやつたが中々去にあらず、満次郎は諸侯方へ大中劔矢
留の術と御覽に入れたく弓術師範役一人ツ、借用いたし度い趣

むき申入る、諸侯委細承知いたしたと快よく受合はれる意上當日
に相成れば有馬玄蕃頭屋敷へ退々か出でに相成る、有馬の家の中
忙しき事一通りあらず諸侯方は滿次郎に面會御土産として大き
は二三百兩少なきも五十兩位のは持て参られる事ゆゑ多分の金
が集まりました、意上十三郎諸侯面前に於て大中劍の極意と現は
す一席

第十一席

馬見所正面には樓敷と掃へ金屏風を立て廻し毛氈と敷詰り加賀
薩摩仙臺細川黒田藤州鍋島松平の御一門天下の諸侯綺羅星の如
くに居列びし有様は、何に比喩やうもあらず一番二番の聞と引き弓
術に勝れし人々樋口十三郎の向ふへ廻り射掛し矢と義忠大中劍
の極意と以て切拂ひ一筋も身体に中らず其の働らき人間業とも
見えざりけり一同の諸侯殊の外御賞美に相成り十三郎御前へ御

召しになり御盃と賜はり中に氣の早き諸侯は劍術指南番に召抱
えんと仰せられ我も乃公もと上意十三郎は滿次郎殿と以て未だ
武藝未熟のことゆる日本六十餘州を修業いたし其の後御厚情と
改ためて頂だるんと辭退に及ぶ諸侯大いに賞美に及び數々の賜
はり物が有り御歸りに相成りました、滿十三郎今日は別して大儀
ぢやつた十ハア恐れ入りました、御前の御引立に依りやん事さ
御方へ御目通りも出来其上御盃までも戴ださし御恩生々世々
忘却は仕つりません、滿イヤ斯様多分に金子もあるが此の中二百
金と其方に遣はす長の道中不都合の節は書面一通と遣はせば何
時たりとも送つて遣はすであらう、十ハア誠には有難き仕合せと二
百兩の金子と頂ださ満次郎飛騨守へも御禮と申上げ江戸表と出
立いたし夜に泊り日に歩み東海道と別條多く尾張國前後と申す
所へ参られる是は鳴海より一里はと手前茶見世に腰と打掛け、



傳 勇 義 口 樋

爺いや何時だ爺左様でござい升八ッ半少し廻りましたの十「ウー
ム、然うかあ、話の處るへ年齢六十餘りのさまで立派な身振りでは
ないが紙入留の小脇差とさし、籠甲竹の杖と突き老「ハイ御免爺オ
ヤ御隠居さん被爲入いまし老「茶と一ぱいお呉れ爺「エ召上りま
し。茶と呑みながら老人十三郎の顔と「ウー見て居る、餘り人に
顔と見詰られるは何となく極りの悪いものもゑ十三郎横向きに
なれば愈よさし覗いて居る訝しな爺いだと思て居ると老「ア「モ
「卒爾ながら一寸伺ひます十「ハイ何でござるな老「エ「失禮なが
ら御見受け申せば武藝御修行の先生と存じますが十「左様如何に
も武藝修業者でござるな老「ハイア御言葉のやうす關東の御方と
存じます十「されば關東でござる老「ア「關東には日本一の柳生
先生其外數多の先生が被爲入いすが貴下は何方でござい升十「さ
れば身共上州真庭でござる老「ウー「真庭村には念流の名人樋口

傳 勇 義 口 樋

十郎左衛門と仰し居る方は御出でにありますが御存じでございま
す十「如何にも存じて居る老「ヘ「ユ「其十郎左衛門様より御養子
の十三郎先生と仰しやるのは大した御腕前ださうで十「ハ「ア老人
貴殿十三郎と存じゑ老「イ「エ「お戸通りは致しませんが私し孫
が武藝が嗜で夫ゆゑ御話だけは承たまはつて居ります貴郎は其
の真庭の樋口先生の御一家でもありますか十「イヤ貴殿に實め
られて近頃赤面の至りだが拙者十三郎と申す者ぢや老「是は辨ま
へません事とは云いながら存外の失禮と申上ました平に御勘辨
と願ひたく、私し義は此の先鳴海宿の北岡齋と申する者、悴は太
左衛門と申しまして尾州殿へ聊さる御用と達して居りますと、ど
ぞ今晚は手前方へお出でになりまして御一泊下さいまするやう
十「ハ「ア兼々噂に承たまはつた金御用とかと勤める北岡氏と仰
しやるゑ某しとても知らぬ事とは云ひながら頼だ失禮と致した

樋口義勇傳

「どう致しまして是非どうぞ御出で願います」
「然らば御同道
といたすでござらう。兩人茶代と拂ふて打連れ來つて見れば白壁
造り長屋門立派な位。此の親爺の姿と見るより大勢の召使ひと
見えて玄關へ兩手と仕へ町寧な扱ひの十三郎案内に従がい一聞
へ通る。入湯と勤められ來つて見れば其の見事あること尋常にあ
らず風呂を立出で襟側傳ひに參る向ふにボン／＼ボン／＼
竹刀打の様子「コレ、那れは何ぢや女、ハイ御客様若旦那が劍術と
仕つて被爲入るので「ウー、然うの汗水と流して習ふ劍術の役
にも立ぬ御代ぞ目出度き町人に入らざる劍術の稽古と笑ひなが
ら座敷へ戻り酒の馳走に預り居る所へ年頃十八九才の男「御
免と被ひる「ハイ何方でござる。〇左様私し義は當家子息太三郎
と申す者今晚はようころお出でに相成りました「ハイ左様で
ござるの身共十三郎と申す者お見知り置られて御懇意と願いたい

樋口義勇傳

御老人より途中ながら承たまはりしは其許でござるか武藝御熱
心の趣ひき御主人にも未だ御目に懸らん夫ゆゑとんだ失禮とい
たした太「イヤ父は不在でござる左様な事は宜しいが先刻町人に
は入らざる劍術と稽古いたすの役にも立んのと仰しやつたさう
だが手前方は尾張殿御金御用苗字帯刀御免の家柄殊には私しは
ト傳流の劍士尾州殿へ御指南番六戸郷左衛門の門人にて近々極
意皆傳にもならうといふ腕前の者「アハ、ハ、ハ、ナニ極意御皆
傳夫は結構でござる太「イヤ先生貴所御笑ひますつたあ打は町
人の武藝は役に立んと飽まで思召して在つしやるが一本御手合
と願ひたい「ハイ御身の武藝を笑つた譯ぢやアない太「イヤ然う
でござらん是非御手合せと願ひたい云ひ角つて居る所へ隠居駕
齊來り「コレ、太三郎何だお客様へ失禮千万な先生平に御免
と願ひます太「イヤ祖父さん御捨置き下さい「是よ困つた者だな

種口義勇傳

どうの種口先生御勘辨と願ひます本「イ」祖父さん打捨て置て下
さい強て一本願ひたうござる「十」ハ「イ」御對手と致すでござらうが
御老人が御心配とあさるらマア止りませう「是」さどういふも
んだ太三郎此の先生は貴様のやうな者と御對手になさるやうな
然んな御方ぢやアない本「イ」ヤ武藝者でありながら他流試合と申
し懸られて言葉と左右にして試合と遊れやうといふのは全たく
の真庭の種口ぢやアあるまい偽物だらう「驚」黙れ……先生御勘辨下
さい太三郎然んなに貴様は試合と願ひたいの「本」ハ「イ」願ひたうご
さい升「驚」然うの先生御迷惑ではございませうが一本懲しりの為
め御教へ下さいますら蘇いゝら願ひます十三郎餘りといへば
太三郎の暴言此ういふ人は取て押へて意見といたし遣はさんと
存じ「十」宜しうござる「サ」アお出でござい「本」ア「イ」ヤ先生御支度と願
ひたい「十」「イ」ヤ手前の方に打たれる愛ひがないゝら支度は別段に

種口義勇傳

入らん遠慮なく來さつしやいと採側へ着座いたし扇子と取て身
體へに及ぶ太三郎手早く支度として竹刀と眞甲に振るふり「ヤ」ッ
と云ひあがら打下さんとなしたりしが十三郎の身体に一寸の透
もなく十三郎は先方の様子を見れば極初心「十」如何でござる打込
めませんら夫でも近日極意皆傳の御腕前「此」うしたら打込めま
せうと体に鞠さる透を見せる太三郎は眞甲より風と巻て打ち込
む竹刀ヒ「フ」リ体をはされ、様板とヒ「ッ」取直さんとなしたる
所、扇子の先あて竹刀の只中と「ク」イッと押へ「十」如何でござる御子
息引けまする本「ウ」ム、氣合と入れて竹刀と取直さうと思つた
が宛然釘附に致した如く押せども引けども動らばこそ、眞赤にな
つて居ると十三郎扇子を引けば再び打込む竹刀と先方の方へ
打落し驚るく太三郎の首筋へ扇子を當がへ「ク」イッと押せば四道
ひになり起んとすると動らせず「十」如何でござるは、是でも町人の

樋口義勇傳

て暫らくの間白眼合て居しが一聲叫んで打込む東馬の木劍体と
うはし入身になり左りの肩口とヒッリ扇子とは云ひるがら名
人に打たれた事ゆゑアツといつて木劍と取落せしが残念と云ひ
さま組附さ来る十三郎扇子と咬へ左りの手が襟髪へ掛ると見
えしが右の手が袴越しと捕へ一振ふつてアーン黒板塀と越して
投げ出だす大勢集まり居りし男女の召抱え東馬と憎み居りし所
ゆる聲と上げ手を叩いて十三郎と賞めろやす東馬は痛さと爾へ
起上りしが面目と失なひ其儘尾張名古屋とさして逃出だす十三
郎驚齋と諸共に太三郎へ意見と致し其夜は當家へ一泊と致しま
した

第十二席

疑ては思安に能はずと譬へにもある通り太三郎今まで武藝は人
に劣らじと思ひ居りしも十三郎の意見に依り無明の夢の覺り此

樋口義勇傳

度師匠穴戸郷左衛門熱田大神宮へ頼而奉納の寄進には第一番に
金子五十兩差出し當日源平野試合の禰りに充分腕前を振んと心
得しが町人には武藝は入らざる事と知り金子だけと差出だし本
人病氣と號し當日不參穴戸郷左衛門は今まで氣組み居り太三郎
俄の病氣は十三郎の所爲と門人井上東馬より承たまはり殊に
は東馬太三郎まで小兒のむとさ扱ひを致せし樋口當所へ来る
は必定其の時此の意趣を返して呉れんと固より心宜しうらざる
ものゆゑ支度いたして相待て居る十三郎は兩三日北岡方へ逗留
いたし尾張名古屋へ夫より参り本町菅屋三四郎方へ止宿なし御
城下と見物いたす御三家隨一の尾張侯の御膝元繁昌いはん方
く今日は熱田大神宮の神前にて源平野試合のあると聞き來つて
見れば近郷近在より集まりし見物黒山の如く町人百姓拜見勝手
次第此の中へ交り入れ替り立替り素面素小手の試合と見て居る

樋口義勇傳

時に井上東馬師匠郷左衛門へ大勢の中に樋口の見物いたして居る事と申し入れ何のあれかしと思つて居る中左右より進まれし若侍の試合餘りの未熟に思はず十三郎笑と含んで居る後より○コレ貴様は先刻より一同の試合と見物いたして居りながら何が可笑て笑ふ十「イエ怪しうらん事でござい升私くしは謙しんで拜見いたして居ります○「イヤ笑つたに違ひない見受る所旅侍のやうだが十如何にもお言葉の如く禮儀作法も辨まへん田舎侍無禮は平に御免と願ひたく併し笑つた覚えはございませぬ○「イヤ笑つたに違ひない他人の武藝と見て侮どり笑ひと致すからは定めし腕に覚えがあらん早々参つて一試合仕つれ十「イエ左様の覚えは毛頭ございませぬ△如何いたしたのだ山本氏○「されば此の侍各々の試合と見て冷評といたして居る夫ゆゑ立合と申入れて居る△夫は不屈の奴だ面倒だら引立玉へ○心得たりと氣早

樋口義勇傳

の若侍ハツツと二十人ばかり前後より進んで参り十三郎に打て懸らんとあし如何に言譯いたすといへども聞き入れなき事も今も餘義なく十三郎も先方の無禮を怒り已に珍事出来に及ばんといたす今まで面白可笑く見物いたせし老若男女東西へ散亂なし混雜一方あらず折しも大勢の人と押分け年齢五十ばかりの立派の侍アイヤ各々暫らく待ち玉へ如何なる陣かは知らず今日は大切ある武藝獎勵の爲めお催はしに相成りし立合ひなるに大勢いたして一人と捕へ争うひといたし玉ふは何事とござる拙者此の場は預り申す強て勝負いたさんどあらば此段御目附衆へ御届けいたすでござらう若侍何者ならんと見れば殿へ左分利流槍術指南いたす佐分利主膳あるに依り是は何方と心得たら佐分利先生でござるの御辨いたしがたき奴ではござるが尋公様御仲裁に依りお任せ申すでござらう主早速の御承知千万番け

樋口義勇傳

の眞黒出立の侍、八九人前後より押取包む十三郎跡へ下り覆て木立に取り、十、アイヤ何方でござる人達ひと致し玉ふな拙者は樋口十三郎と申するもの他人に意趣意恨と含まれる受えのあゝもの。○黙れ汝と十三郎と心得ていたした意恨の数は其方の胸に受えがあるならんイザ尋常の勝負に及べ。十、是はしたり十三郎と知つて斯く亂暴いたさるゝ尋常は。○如何にも某しは郷左衛門の門弟井上東馬、十、ハ、ア扱は北岡方に於て面會致せし東馬殿、東、マイ各々面倒だ、やつて仕舞へつと前左右より切り込み来るに今は餘義ある城四郎信國の一刀鞘と拂ひ覆て木立に取り、大中劍に身構へに及ぶ大勢の者討んとするといへど先方の体に一寸の透もあらざるに依りヤ、ツと互ひに腕と見合して白眼合てあつたりしが正面より切りこんで参つたる東馬の一刀心得たりと体よりはしヤツと一聲樋口の一刀井上の左りの肩先より乳の下掛けて袈

樋口義勇傳

袈切りに切て落す透と何が横合より切りこみ来るゝ体とひねり横に拂つた一刀に眞眉間と割り附けられアツと倒れる横合より又も切り込む兩三人心得たりと篠木と削り鏝と割り千變万化の秘術と現すし前にあると思へば後るに隠れ右と打てば左りにあるはし必死に争うつて居る折しも名古屋御城下の方よりハイヨ、馬と煽つて乗り込み来りし一人の侍、アイヤ樋口氏と確かに持ち玉へ下郎の忠心により佐分利主膳此の所へ御助に参つたり卑怯未練の汝等片々端より槍玉に上ると槍とひねつて突掛る一人の十三郎とても手に餘つて居る所へ主膳の加勢まいつて浮足に相成たる中より郷如何に門人衆高の知れたる十三郎主膳の兩人打つに難き事あらん郷左衛門の腕前と見玉へと盛み掛けて切り込む一刀右の對手と十三郎は必死に相成り打合て居りしが切り込み来る穴戸の一刀と物打際にて引拂ひ入身に相

成りヤツと一聲切り込む樋口の一刀受るも引くもあらばこる首筋より胸先まで切り込まれ倒る、師匠の様子を見て遣は叶はじと逃げ出だす、主膳は聲と掛け主「アイヤ樋口氏逃る者は遣ひ玉ふな御身に怪我はあらざらむし、是は佐分利先生一度ならず二度まで危うい所と御救ひ下され忝けあう候幸はひ一ヶ所の薄手も負ひ申さず、主「夫は重疊過日の意恨返さんといふ、穴戸等の卑法の働らき憎んでも飽足らざる奴何は兎もあれ早速御目附けへ御届け致さんとして馬より飛下り辻番所へ來り一通り此段と申入れ十三郎を連れ城内へ歸りお目附太田勘左衛門之御届けに及ぶ、勘左衛門夫々重役へ翌朝申上げ死骸と改たれば穴戸郷左衛門井上東馬外門人三人右死骸は親族へ御引渡し穴戸の家名は改易、關係の者は夫々御調べの上御處分に相成りました、十三郎は主膳の計らひと以て別段に御構ひなし併し當所に長く足と留めて居らば

穴戸等の一家の者如何なる事といたさんも計りがたく是に依り主膳へ万事禮と陳へ天照宮太神宮と拜さんどて宮の驛より舟に打乗り桑名とさして出立いたされました

第十三席

十三郎は桑名へ上陸致し四日市退分より白子とさして参らんとする向ふに何か大勢の八聲何事やらんと來て見れば見上るやうなる馬士大勢年齢十四五才に相成らんとといふ馬士と捕へウイ、といふ騒ぎ固より氣強き樋口大勢と押分け進み寄り、主「コレ如何いたした、主「甲へエ旦那ア聞てお呉んなせ、此位お思やしい奴はありません、主「ウ、ウ、何う致した、甲へエ私共が茲へ集まつて今日は暇だ、あら、御術と仕ふ真似として遊んで居ると此の馬士が通り掛つて頻りに笑ひます、あら、今勝負としやうと致して居る所です、全体此奴の親父は元武士だ、といふので些たア此奴も

傳 勇 義 口 樋

御術と知てるもんでその度々家業の妨たげとしゃアがるんで
す十ハ一然うか片言では分らん、コレお前は此の者のいつた通り
る士ハ一是は御武家様恐れ入りました、笑つた譯ではございませ
ん私しは此の先の吉岡村といふ所に父と諸共に居ります小文吾
と申まする者父は長らくの病氣如何ともそる事が出来ませんの
で斯様の賤しい業といたして居ります此の方々は私しに仲間入
としる酒と振舞へと申ます何はどでも鳥目を取りませんければ
父と養なふ事が出来ません、コレくく嘘ばつあり吐やアがる
汝に何時酒と買へといつた、且那此の野郎の爲めに私共の客と皆
な取られちまいます、イエ御武家様皆さん方は駄賃と餘分に取ら
んければ参りませんのと私くしは先方の仰しやる通り安く参り
ますうら自然とお客も餘計にありませうな譯で夫を兎や角仰
しやるのでございませす十ハ一左様のコレ貴様達何れに利があ

傳 勇 義 口 樋

るのには知らんが汝等大勢にて若年者を捕へ争うひといたすは餘
り宜しくあるは乃公に任せる。〇ハ一有難うござい升どうか宜
しきやうになすつてお呉んなせ。十早速の承知喜こばしく心得
る少々ではあるが是にて酒でも飲んで呉れ。〇是はどうも飛だ御
散財と掛けて恐れ入りました、コウ皆お禮と申しね、且那が酒
と呑めと一分下すつた、ハ一有難うござい升どうも恐れ入りま
したと禮とッコく、に陳べ大勢の馬士は退散に及ぶ。十コレお前
は此の先へも参るの。士ハ一且那有難うござい升白子の在まで
戻りますもの。十然うら然らば白子まで乗せて行て呉れる。士ハ
一有難うござい升どうぞ御召し遊ばして、十三郎は馬に乗りつく
く様子と見れば中々氣猛き若年者。十是よお前の親父は御術と
殺へでもする。士ハ一ハ一お尋ねで恐れ入りますが私しは武家派
人母は先年病死いたし縁あつて前申上た吉岡村へ参りしは八年

種口義勇傳

百二十八
はるり前中風の病ひで身体も自由ならず手習學問と教へて居り
ました所一昨年より愈よ病ひは重り今日にも差支えませしゆる庄
屋様より此の馬と借りまして日々駄賃と貰ひ夫にて親子が命を
繼いで居ります其の中にも父の申すには貴様は一人前の侍にし
てやりたい夫には武藝と覺えて置かんければ行んど聊さる教へ
られましてござい升且那様は御武藝御修業の御様子御浦山敷う
ござい升「扱を氣の毒千萬る小文吾とやら其方方へ安内といた
せ父に面會といたし執心とあらば武家に致して遣はしても宜し
い小「エ有難うござい見苦しくとも御立寄り下さいますし、と
夫より白子の宿と横に見て十七八丁参りますと軒端傾むく羽出
のあばら家小「モ且那是が私しの家でござい升「左様な馬より
ヒツリと飛び下り小文吾は小「親父さん今戻つて参りました父「
「小文吾定めて勞れたであらう、サア、茶も沸て居る食事とな

種口義勇傳

さしやい小「貴方の御病氣は如何でございますか夫にお客様
とお連れ申ました父「ナ此の見苦しき所へ「眞平御免下さい父「
「此方へ御掛け下さるやうに……ヤ眞庭の若先生おやアござ
らん「ナ「左様仰せの貴殿は何日ぞや父上方へ武藝修業の爲
にお出でなされし谷村左門殿不思議の處で左「如何にも其許も何
も御健勝にて大慶に存する何は兎もあれ小文吾御洗ぎと取て差
上る小「ハ「ア是にて御足と洗ぎ遊ばせ「眞平御免十三郎足拵
らへと取り足と清めて着座といたし一別以來久方の面會如何る
すつた主「左されば若先生其の確りはいら「失禮といたしてご
ざる拙者其後歸國いたし老先生より傳へられし眞庭念流を以て
主人へ劍術御指南といたして居る中生に附ての武骨者夫ゆる重
役の機嫌と損じ遂に浪人斯の如くの境界近頃面目次第もござら
ん「イヤ武骨は武藝者の常其節御咄のありし御子息小文吾と仰

種口義勇傳

しやるは左如何にも那れに居る俸でござる妻は先年病死いたし
些の縁にて當所へ來り細くも露命と繼いで居る中三年前より
此の業病彦根の家にて二百石の祿と汚せし俸ゆる世が世であら
ば充分武藝も仕込めるのでござるが我が病氣と直さんどてか
うしい馬追ひにまでなり下りしも此の身の不幸御賢察と願ひた
いとハラハと落涙小文吾は慙慙に手と仕へ小只今は且那樣い
るく御厄介に相成り有難うござります御父上途中にて大勢の
馬士の爲りに取巻られしとお助け下さいまして御座います左
藤の夫は千万番けなうござる十イヤ其の御禮では痛み入る某し
は云々斯様く我が身の上と物語り是より愈上武藝修業いた
し名と揚げ家を起さんと始終の話と耻やますげに承たはつて居
りし俸の顔と見て左如何に樋口先生是なる恩息何卒御邊の御門
人に遊ばされ武藝御教授と願ひとうござる十身不當ながら如何

種口義勇傳

にも承知いたしてござる拙者も何れ江戸表へ参り道場と開るん
の心得ゆる貴殿はゆる養生となされ御全快の後手前方へお
いで下さい左ハア何分宜しく願ひ奉つると其夜は様々の物語り
十三郎小文吾と連れ参り武藝と仕込みたくは思へど父の病氣ゆ
ゑ一刻も手放しがたきと存じ居る左文吾も左の如く兩人の様子
と谷村左門は熟々眺めて其夜は寐物語り夜と更し翌朝十三郎
起き出る假はらへ周章しく小文吾來り小先生大變が出来いたし
ました十ウウ如何いたした小ハハ只今見ますれば父は切腹いた
しました十エーッナ切腹と如何いたしてされば斯の如くで
ござると先に立ち納戸へ連れ立ち來つて見れば覺悟と見えて一通
の書面と枕許の机の上に位牌と諸共に差置き左りの助へ突通し
右の脇腹へ引廻したる短刀咽喉と貫つき物の見事に最期の様子
ウウ〜いたして居る小文吾と宥め樋口十三郎殿谷村左門拜と

樋口義勇傳

認ためありし書置をふし披いて見れば我が身の業病より行末望
みのある俸小文吾と空しく朽ち果てさせん事と嘆き我が身の全
快いたさゝると覺悟いたし切腹いたすとの文言又小文吾が身の
上と詳しく頼まれし初め終りと讀み下し十三郎誠心いたし早速
此段と庄家へ届け死骸を恐るに埋葬いたし小文吾諸共一七日の
間當所へ足と留り家と引拂ひ小文吾に旅の支度とさせ我が荷物
と撥らせ此所出立いたし泊りく旅籠屋或は山中にて武藝と
仕込まれる所生れ附ての氣用者武藝は固より執心又より授けら
れし脚前もありしゆゑ些かの間に退々上達いたし未頼母しく存
じ日に歩み夜に泊り諸國と修行いたし大坂道頓堀河内屋六兵衛
方へ止宿いたす大坂市中と見物いたし晝の勞れに前後も知らず
一睡の夢とまどろまんとなす時枕邊に漂然と現はれしは五年以
前に別れたる父十郎左衛門髪と亂し面色青ざり總身血まぶれに

樋口義勇傳

なりて左も恨めしき説色十三郎起き直り是は父上久々にて拜
いたし候如何いたしてござる變り果たる御姿いつの間にお出
でに相成りしや存せし事とは申あがら御出迎ひ致さゝる無
罪は許し玉へと云へども答へず十御父上く取違らんとした
る傍はらより小先生夢でも御覽遊ばしたか先生…十ウハ扱は今
のは夢でありしかハテ不思議な夢と見るもの哉父上身の上に間
違ひがなければ宜いがと其夜はふせりしが其の翌夜も同じ夢三
夜の間忌はしき夢を見しゆゑ一度故郷へ立戻らんと大坂と出立
いたし東海道と關東とさして出立いたされしが是ぞ正夢にて關
東の鬼神といはれし樋口十郎左衛門の身の上に容易ならざる珍
事出来の一席

第十四席

上州高崎の城主安藤右京之進重長へ天流の劍術指南役荒井彈正

樋口義勇傳

舍弟大覺とて食祿百二十石を領し家中一般の者へ武藝と教えて御覺えも目出度く尤も通ばれな腕前荒井の門人菊川佐七相馬源藏今日非番とて城下へ参り小料理店の奥座敷にて互ひ武藝の咄といたし酒酌み交して居られる源十郎菊川我が師匠を賞るは訝しいが實に剛いものだろア佐左様先づ關東で柳生侯の先生と除けたら第二番目位ならうなア源十郎第二番目たア訝しいぢやアあいか拙者は第一番だと思ふ佐イヤ然うでない第二番目たらうよ源コレ然らば一番といふは關東では誰だ佐左様真庭念流の達人樋口十郎左衛門關東の鬼神と云はれる位なら殘念ながら荒井先生より一階上手さ源是はしたり十郎左衛門は老人麒麟も老ぬれば驚馬何で我が師匠に及ぶへき尊公妙に樋口を賞めるのは訝しいぢやアないろ佐アハハハハ拙者は何も彼れ下面會をした事はなし只賞る譯はないが世間の者が左様申す

樋口義勇傳

あら源夫は行ん乃公ア何うしても御師匠御兄弟の方が剛いと思ふ尊公は樋口とゑらいいいふ茲で論として居ても果しが違ふいはら真庭村へ行て樋口の武藝と試して来やう源夫は止し玉へ我々が参いた所が逆も及ぶべきではあいな源黙れ高の知れて居る樋口に左様に驚ろくといふのは菊川平常の太言にも似合はんぢやアないか貴様思なら乃公が一人で行く佐然ういふなら拙者も同道いたす兩人勸定と拂ひ當家と立出で醉脱隠隠として真庭村と志さしアアコレと差掛る真庭村の作場道横合より見上るやうなる五十餘りの親爺脊負稽子へ薪を結び附けて手頃な棒と杖にして急いで掛る手合頭源コレくぞい邪魔だ除け爺へエ源是さへエではないワ往來の妨だけに來る然んる大きな荷物と脊負で退けといつたら退らんか強情の奴だ爺へエ往來の邪魔になるぞ貴郎仰しやるが茲は往來ぢやアございません真庭村の作場道

樋口義勇傳

往來は彼所に見えます松並木が然てござい升源ナニ生意氣の事
と申すな我々何と心得て居る殿様へ天流の劍術御指南番荒井
先生の内弟子拙者相馬源藏那れに居るのは菊川佐七だ無禮と申
すと切ちまうぞ爺アハハハハ、貴郎大層威張んなさるが御武士
といふものは弱きと扶けて強きと挫く御覽の通り年老た私くし
斯様な高荷と脊負て居るんでござい升除けてお通しなすつても
貴所の耻にやアありませう何も此の狭い所と列んでお歩行な
さらすともお宜しうございませう菊何だ奇怪の事と申さば手耐
に致すぞ佐是はしたり相馬止し玉ひといふのに老人貴様よくな
い謝まつて終へ爺ニ一何で私しが謝ります悪い事としたは
ぬのないもの詫る筋は御座いませぬ源ニ一云はして置けば奇怪
な覺悟しろと威しの爲めか相馬源藏一刀の鞘と拂ふ老人見るよ
り高荷と傍はらに下し棒と取て身構へに及ぶ源藏正面より背打

樋口義勇傳

に致さうと打ち込み來つた一刀休とらはし、ロント老人の棒源
藏の左りの肩口と打た事ゆるアツといつて其の儘ドブーン深田
へ落る菊川佐七は之と見て佐朋友へ手向ひをいたした無禮者其
所引くるつと柄へ手と掛る所を踏込む老人己れの身体と先方の
胸板へ當てる体當りと喰つてヨロ／＼とよるめく所と腹の邊
りと横に拂はれ是も同じく深田へドブーン起上らんといふ二人
と見て爺コレ貴様達よく聞け私にはア樋口先生の家の飯焚親爺
だが元は是でも北國切ての角力取り大關までも取た沼田山利根
右衛門といふ者真庭村に居る者は子供に至るまで武藝と知らん
者は一人もないぞ高の知れたる未熟の腕前と以て人と切らうと
いふなア押が強い今日の所は勘辨としてやる以來嗜なめ餘り弱
くつて氣の毒だらう強くなる唱阻としてやらう呆氣に取られて
居る兩人の頭へ前とまくつてアヤア……利アハハハ、乃公が小

便でも呑んだら些たアきつくるだらう馬鹿野郎此の老人はく
らゝる酪町いたして居つたど見えて飽まで兩人に悪口いたし傍は
らに置た荷物と背負ふて行き過ました跡に漸々起出たる兩人貌
と見合せ落して置たる刀と鞘におさめ何のヒツ／＼相談と致し
て再たび以前の茶屋へ來り身体と清め衣類を取寄せ何喰ん貌と
して師匠道場へ立戻る彈一菊川相馬何方へ今日は參つた佐へ
エ先生御城下とフ／＼遊んで居りましたが實に今日は殘念で
ございざした源如何にも菊川のいふ通り某しは直にも踏込も
思つた位でア一殘念だつた彈一何が左までに殘念だつた佐
「ハイ先生へ申上たら如何に思召すかは知りませんが弟子の我々
實に一分が相立ません喃相馬彈一何れが然んなに殘念だ其方
等のいふ事は分らん譯と聞せる佐成程お分りのないのは御尤と
も前申上ました通り御城下の菊屋で一杯やつて居りますと來る

奴も／＼昔武藝の話し關東一の大先生は柳生小野兩人と除けて
は真庭村の樋口十郎左衛門鬼といはれた位の荒井御兄弟が如何
に剛いと申しても逆も及ぶべき者でない近々山名八幡宮へ先生
方が奉納とした額面と引剝して參ると樋口が申して居るとの事
「ア夫と承たまはりましたから相馬と拙者と然ういふ事はない
乃公が先生が樋口あんに何で一緒になるものゝと申しました
ら先は大勢此方は兩人終に云ひ負けられました源「されば只今菊
川が申す通り樋口の奴が影にて先生と悪口雜言といたして居る
さうでお捨置に相成りましては貴郎の御耻辱ばありではない殿
の御耻辱に相成りますすゝら早速上へ申上げ御前に於て晴の勝負
をなすつたら如何でございませう兩人變り／＼進められる荒井
兄弟は武藝は能く出来るが元來心ねぢけて居る者此の話と承た
まはり駄念と致して居る兄の貌と眺めて舍弟大覺大兄上源藏佐

樋口義勇傳

七のいふ通り捨て置く時には此の上如何やう彼等が申すかも知
れません早速御願ひ立てに相成たら如何でござらう拙者も樋口
の高慢の事は度々承たまはつて居りますが高が郷士と對手にと
捨置たやうあるもの、最早聞き捨にはありません彈ツム、舍弟汝の
勤めと云ひ兩人の言葉と云ひ如何にも拙者願ひ出ださう源夫の
やア先生お願ひ立にありますが彈ツムされば願ひ出だすであらう源
「夫は結構樋口さへ打ち込んで終へば貴公が關東第一番早く
と三人の者に勤め立られ翌日御重役まで樋口十郎左衛門と勝負
いたし度き趣むさ言上に及ぶ家老隅田大膳を御召しとあり右
京之進此事如何にあらんと御尋ねに相成る大膳は樋口の腕前は
兼ても知り居り荒井兄弟の新參御召抱えに似合はぬ不都合の所
業あると心悪く存じて居りし事ゆゑ今の中御前に於て勝負をさ
せ兩人後れを取れば是と幸はい長の御願と遣はし其の上宜き師

樋口義勇傳

と撰んで殿と初め一般の家中へ御指南させる御家の爲りと存じ
然るべくやう存じ奉つると申上げ殿より御許しに相成り樋口方
へ此段と達せられる折節十郎左衛門の病ひと煩らい殊の外難
澁夫ゆる御免と願ひ奉つる荒井兄弟此の事と承たまはり扱も樋
口我が腕前に恐れ作病と致せしものならんと心得再三願ひ出す
に殿より改ためて御沙汰に相成れば樋口方へ達せられる十郎左
衛門の御答へに再三の仰せと辭み奉つるも恐れ入る病氣全快後
仰せに従がはんと謹んで申上る此方は彈正舍弟に向ひ彈コレ大
覺樋口は全たくの病氣の大左様ださうでサグリと入れまして承
たまはると全たくの様ですが實は恐れられた所があるかも知れませ
ん拙者の思ふには山名八幡へ参詣いたし戻りに樋口方へ参り病
氣と尋ねると就して彼と悪口いたしてやりましたら残念に存じ
て無理に勝負をするのも知れません、さすれば彌々勝利は疑がい

樋口義勇傳

あゝもの兄上此の計略は如何でござらう彈成程至極面白く彼さへ居らすんば我は關東第一早速参るといふ事に致さう支度をしる大ハッ承知いたしました、菊川相馬の兩人と供に連れ何れも美々しく扮装し、真庭村へ來られ樋口の門と入らんとした時ノッ、と出て参つたる利根右衛門、源藏佐七は忌な爺が來たと顔と反けて居るの、と見ながら源ヤア是ア先達ての先生方藥の功驗は見えましたるアハハハハ、と高笑ひをして行き過る、源藏佐七赤面の様子兄弟は更に心にも留めず立關に立上り、彈ひく、〇どうれ。立出でた取次の者何方らお出でになりました彈ハハ拙者は殿様へ劔術御指南荒井彈正舍弟大受と召連れ、山名八幡宮へ参詣の戻り樋口氏御病氣如何あらんとか尋ね申しに推参いたしました宜しく取次で呉るやうに、〇ハハ長こまりました、〇御新造さん只今斯様、仰せられて立派の御武家が被爲入

樋口義勇傳

いたしました、オヤ然うでございまする妻のお秋は夫病氣見舞の爲り参り居る當村の名主菊地利右衛門此の人も樋口の高弟にて目錄以上の腕前荒井兄弟の來りし話といたし如何に致したものとらんと相談をいたし、利右衛門己れ一存にも参らん事ゆゑ十郎左衛門に一通り申出で、利先生是は貴方がお逢いにならん方が宜うございませう、私しが何と御挨拶と申して御歸し申ませう、十郎左衛門は重さ頭と上げ、十ハア荒井兄弟が参つたコトヤ拙者、會をいたすでござらう兼々彼の人々の行い良しむらさる事は承たまはつたが我が病氣と作病にても致して居る事と心得て参りしものと見える、拙者達はずんば此後如何なる事と申すやも知れがたし菊池氏病中不禮は前以てお断はり置さ下さい相ハハ夫は宜しいが、跡で御身体の御障りになつたら、十ハハ苦しうござらん、利右衛門れ秋の留ると聞らす強て遣はんと申するゝゝ利右衛門

傳 勇 義 口 樋

は客間へ通せし荒井の前へ来り是は初めましてお目に懸ります
私し事當村役元菊池利右衛門と申する樋口門弟にございませ
能くころ御尋ね下さいました彈左様でござるの某しは前申した
荒井彈正是なるは舍弟大覺山名八幡へ参詣の辰り御病氣如何あ
らんと心配の餘りお尋ね申した利ハハ誠にて委しけなうござい
仰せに從がひお目通りと致したくはございませが病中の事ゆゑ
長髪見苦しき姿にて御目通りは失禮と……彈イヤハ其の義
は頼と仔細ない是非御目に掛りたい利左様でござらば只今
彈イヤ苦しうござらん御病間へ推参いたす御案内願ふ兩人刀
と左りの手に提げ飽まで無禮の舉動と致し病床へ来る樋口は布
團の上に置き直り羽織袴と着け兩手を仕へる兩人も梅へ名座
たし通りと見廻した面現しい位惡の相を現はした十ハハ是は初
めましてお目に掛ります手前義十郎左衛門でございませ、以來御

傳 勇 義 口 樋

見知り置られて御別懇に願いたい彈ハハ是は樋口氏初めお目
に掛る身共天流御指南番荒井彈正見知り置て懇意と願ひ大ア
ヤ某しは舍弟大覺でござる十ハハ是は御叮嚀の御言葉恐れ入り
ました先日某し如き未熟老人と人がましく思召され御前に於
ての晴の試合有難く存せし處生憎此の病氣の爲に其の意も果さ
ず實に人は病ひの器とは申ませ……彈ハハ御病氣では仕様が
あるが併し御病氣の方が宜い方も知れん我が流名は少しく手荒
いので素面素小手の木劍試合喧大覺大如何にも兄上の仰しやる
通り御病氣といつて伸して置なざる方が御身の御爲でござ
らう承たまはりし十郎左衛門は素より疝癖の強き男思はず眼丸
と切り上げ十アイヤ兩先生拙者及ばざるは心得て居るが決して
臆病風に誘はれ作病と致すやうな者ではござらん彈イヤ作病
とは云はん只御病氣が却つて幸はいあるも知れんと申しただけの

樋口義勇傳

事先づゝ御養生が第一でござる大兄上御暇いたさう樋口氏御
加養なさい大きに失禮をいたしました十へい飛だ見苦しい處へ御案
内をいたし失禮を仕つりました何れ全快の上御手軟らうに御相
しらいと願ふでござらう如何にも承知いたしました成べく手軟や
らうに勝負いたすでござらうと其儘兩人は利右衛門お秋に暇を
告げ立戻る跡に残りし十郎左衛門怒り心頭より懸え上り拳を挿
んで残念に思はれました

第十五席

樋口は留むるお秋利右衛門と初め一同の言葉と選をけ何卒一刻
も早く病氣全快をいたし荒井兄弟の高慢の鼻を挫き呉れんと山
名八幡宮へ一心に相成り祈誓いたし三七二十一日既足参りとい
たされ夫も一人にては参りがたし招田山利根右衛門の肩に越つ
て参られしが神の利益の薬の功驗の厚紙と刺すばるゝ二十一日

樋口義勇傳

浦願の當日には大きに宜しく急よ利益と有難く存じ其夜一心に
相成り祈り立し所八幡宮の御告ありとて翌日社の乾の方に當り
し枇杷の神木もつて二振の木劍と持らへ又々一七日の間祈り
浦願當日神前へ來り身体と淨め何卒いたして荒井兄弟との勝負
の禱り應護の利益と與へ玉へど暫らくの間祈念いたし夫より歸
宅致さんと男坂の中はどまで來るに昔より神力石とて二抱えも
おらんどいふ青石がありました夫へ向つて足と留め俄かに襪十
字に絞なし袴の股立ちと取上げ利根右衛門に持たせし一振の木
劍と取直し一聲叫んでフーン風と巻て打當れば其の木劍鏢元よ
りホッキと折れたり今一振と取り再び祈念いたし大喝叫んで
打下し改ためて見ると更に環も附らす是るれば大丈夫と歸宅と
いたす只今以て此の山名八幡の社の後ろの所に七五三と張り
樋口の之を念力石と唱へてあります杖樋口は病氣全快の趣ひさ

樋口義勇傳

と御城内へ申入る、城内にては夫々重役より殿へ言上に及び来る
四月十五日城内馬見所に於て立合仰せ附られ正面の所に機懸
と構へ其外充分用意も整ひ寛永十六年四月十五日常日に相成
れば樋口十郎左衛門庄屋野地利右衛門とはじめ重立たる門弟七
八くと謀共城内へ参られる眞庭村近邊の百姓町人ツロツロ
く来られる四ツ半時双方支度調のいし趣ひき言上に及び正
面機懸の上には金屏風と立て廻し安藤右京之進家老隅田大膳と
はじめ重役前後に扣へ勝負如何にと見物といたす當日勝負見分
けの役として寶藏院流槍術師南番木下新之丞袴の股立を取り床
几に掛り扣えて居る合圖の太鼓と諸共右手の幕張としばり上げ
荒井彈正舎弟大覺と連れ悠々と進み出でる今日の扮装は黒羽二
重五所紋の衣類紺緞子寶蓋し黒鷲絨毛廻し取たる野袴と履き銀
造りの脇差と帯し大覺も同じやうなる扮装何れも身の丈勝れ肉

樋口義勇傳

附宜く左の幕張より立出でし樋口は黒紬紋附の衣類木綿菖蒲皮
染のツツケ袴と穿き赤銅造りの脇差と對し門人野地利右衛門
木劍と取て進む双方御前方へ向つて目禮いたし是は樋口氏早速
病氣全快喜こばしう思ふ彈正御對手致す遠慮なく参られるやう
十ハ、荒井先生過日は見苦しき所へ御見舞に預り忝じけなく
今日は未熟な某し殊更病氣上旬御手軟らるに御相しらいと願ひ
たうござる彈ツム如何にも承知いたした御支度となされ十ハッ
御免と被ると双方袴鉢巻をいたし彈正は袴先二尺五六寸もあら
んどいふ赤橙の握り太の木劍取て眞甲にふり被り只一打と進む
十郎左衛門は例の枇杷の木劍袴先一尺七八寸もあらんどいふと
取直し念流の極意大中劍に取てツリツリと進まれるヤ、ツヤツ
と互ひに掛る氣合荒井は高の知れたる老人と心得打込んとあせ
しが樋口の体に五分の狂ひもあらざるに依り打込む事と得ず樋

樋口義勇傳

口も左右なくば打込ます互いに鋭く見合せ一呼一吸の呼吸を計り稍暫らく白眼み合て居りしが彈正如何なる邊と見たりけん大喝一聲打込み來つた木劍樋口鏑際と以てホキーリ受流し、一聲叫んで一足踏込み彈正の眞甲とヒッパッ充分に打たれましたからアッといふと其儘荒井彈正眞仰向に倒れる其時如何ある譯にてや樋口の左り小鬘の邊りよりサッと血汐が出ました尤ども斯様申上ると大層怒々として居るやうですが左様な譯ではない彈正の打込んだ木劍と受けた樋口が直ぐ切り返したこともゑ對手の眞甲と打ちましたのは豈豈と入るほどの透もないので講談では實地と寫す事が出来ませんら宜しく御推察願ひます勝負見分けの役木下新之丞扇子と開いて新勝負あつた。と樋口方へ扇子と上る、此時大覺銀造りに相成る大劍とかつ取り面色替て甬り出で、大車法あり樋口汝我が兄の爲めに小鬘と打たれしに參つた

樋口義勇傳

いふ聲とも掛す兄の透と打たる段奇怪なり、兄の敵其處引くなつと云ひながら飛び掛らんといたすお機敏にありし右京之進仲ひ上り大音な揚げ右チ大覺の申する所尤ももの玉り響くき樋口の舉動其身以前後れと取りながら彈正と打たる段奇怪なり然るに樋口方へ扇子と上し新之丞心得す大覺兄の仇逆すな新アイヤ御前勝負見分けの役は新之丞に仰せ附られましたる上は手前言上いたすまではお扣え下さるゝやう、大覺殿御前あるぞ無禮いたすな大黙らつしやい尊公依估最負の振舞といたすに何とて此方用捨相成らん新扣えろ不肖ながら新之丞決して左様な事は仕まつらん確らに樋口が勝利彈正後れと取たに違ひない其上ならず侍にあるまじき彼が卑怯な働らき論は無益だ、只今証據と一同の者に示して御覽に入れん、アイヤ十郎左衛門の手創養生といいたし遠はせ、右京之進は新之丞の言葉と承たまはり、早く証據と見せ

樋口義勇傳

るやうといふ強ての御詞新委細長こまり奉つると彈正の取り落
したる木劍と御前へ持参いたし、一振ふれば遣は如何にガラ
南蠻鐵の鎖の先に同じく南蠻鐵八角のふんぞん出
でたり之は一同驚るさし時新之亟衣紋と正し新恐れながら御
前此の木劍こそ彈正が卑怯の証據でござる右ウーは如何な
る品である新されば其の古へ加藤清正の臣宮本武藏政名播州姫
路城内にて佐々木久三郎岸柳と對手に勝負いたせし時岸柳叶は
さる事と知つて是山城守寶山が工風なせし振杖の木劍是は木劍
の中と探扱き鎗の先へ分銅と附つば際になぢあつて押せば出る
といふ侍の尤ども取べき得物先刻樋口は彈正の打込みし木劍は
確るに受ましたたが中の分銅の出るは知らず夫ゆゑカスリ劍は負
ましたやうあるもの、切り返しと以て彈正の眞甲と打たり眞劍な
りせば樋口十分の勝利新様なものと君へ對し武藝御指南と致そ

樋口義勇傳

といふ事世上へ流布いたし候時は御當家の御耻辱宜しく御沙汰
下されたく彈正は天の憎しみに依て只一本の樋口の木劍の爲に
腦と割られ命終りしやうに候、餘は宜しく御賢察と願いたくと辨
舌爽やかに言上に及ぶ右京之進殊の外立腹といたし荒井彈正儀
武士にあるまじき卑怯の舉動存命あれば急度申附べきなれども
死去いたした上は舍弟大覺永の暇申附る死骸は取片附る夫に就
ても十郎左衛門の腕前適ばれ感心の至り目通り申附る早々是へ
樋口は疵養生といたし御目通りへ罷り出で御盃と賜はり有難き
御詞といたし其の上数々の拜領物面目と施こして歸村と致さ
れる大覺兄の死骸と埋葬いたし菊川相馬の二人を連れ安藤家と
浪人いたし何れへ参りし其後更に行衛も知れず眞庭村に盤結
床の權兵衛といふものあり當今は如何なる僻村へ参つても立派
な理髪店があります昔在方の盤結床は亭主が女房と對手に仕

樋口義勇傳

事と致して居ります尤も平常は暇が多いので朝日十五日二十
八日節句正月などは就て込み合ふ今日は十月の十五日村内の者
大勢集まり權兵衛一人にて世上の話をしてたし髪と結て居る所
へ年頃二十七八色薄黒き目の凄き男長脇差と打込み旅装束と
殿重に致せしは博徒とも見える者旅エー御免んなさい少々伺ひ
たうござい升權ハイ何とお尋ねです旅エー外ぢやアございませ
んが此の眞庭村に三河屋重五郎といふ親分の御住ひがあるさう
ですが何方でございませう權エー重五郎親分と尋ねるのらエ
旅然うです夫ア生憎だねへア親分は今年の三月博奕の事此
の村に居る事が出来なくなり何處へ高飛として今ぢやア子分
衆も居ませんよ旅エー夫の困つたねエー吸いたくさす親
分大分お忙がしう權エー有難う客人お附なせエ旅御免下さい大
層御繁昌ですなア權ハア宜い鹽梅に私は皆さんに可愛がられて

樋口義勇傳

居る者だのら勿論平常は此んなに忙がしうアねへ節句だ三日だ
といふと此んなに來てお呉んなさる此ういふ時に職人が居て呉
れると宜んだが旅エー親方私しが些たア此の家業をした事が
あるんですがお助け申しませうの權ハアお前さんやんなすつた
のら夫ア幸はひだ今日一日助て今夜もつくり泊つてお出で
なさい唄アが身体が悪いもんだら私ア今朝ら立詰さ旅然う
ですの夫ぢやア御免と蒙ひりますと荷物と脇差と傍はらへ置さ
足と洗つて上り禱と掛て旅エー親方刺刀と一挺貸してお呉ん
さい權ハイ是をお使ひ旅有難うござい升刺刀の刃と合せ旅今度
は何郎です客人はッロく彼の男の顔と見て甲太郎作おぬしが
番だらう乙ウム乃公の番だが別に急がねへら誰のやらつせエ
權エー太郎作の跡なら次は花之丞さんの番だつねへ乙ア一俺
が番だお止しにしへエよ勤左衛門貴様やれ甲ナエ花之丞汝急い

樋口義勇傳

で居たぢやアねへる乙「イヤ乃公ア止す矢張りいつもの樋兵衛ど
んの方が宜いと思ふら夫にアノ客人は無職渡世の人だから氣
が荒ユに違へねへ氣に入らねエ頭だるんと手荒い事でもされる
と悪いから權モシク皆さんの内誰のやんなせエよ丙「チイ乃公
一ツやつて貰はう成丈お手軟らるに親分やつて貰はう旅宜しう
ござい升、サアお掛あせエ。怖々吉兵衛といふ人が毛受けと持て來
る先づ頭を剃り初め髪を剃うと致し旅お客さん髪とおしめし
なすつて丙「ハア、モ一剃れたるエ、ゑらく早へな乙「チイ吉兵衛さん
どうだつたね丙「宜い心持さ夫に早いや、お願う申しませう權「チイ
くお客さんお前剃刀と何故研つしやるんだ旅「エ一髪と剃る
ですら權「馬鹿アいつちやア往ねへ月代と剃つたり鬘と剃たり
一々剃刀と研いちやア行ねへ旅「エ一どうするんです極「どうす
るもんね乃公なんざア一遍研でさやア五人や八人はさつとや

樋口義勇傳

つちまう度々研やア石も悪くなるし剃刀の減り方も早エ甲「何だ
聞たの太郎作道理で痛エ等だ八人剃て一遍だの、十人で一遍研ぐ
なんてエのはゑれい話だハ、ハ、ハ、其の中吉兵衛髪を剃て貰
ひ丙「ア一宜い心持だいつも此所の亭主に剃て貰うと跡で鬘と撫
てヤラくするのが此の人に剃て貰つたらむく毛までも失なつ
た、髪と結ぶ事も旨かんべエ序でに一ツ頼みませう旅「畏こまりま
した些の間に束ねて終ふ、仕事が早いのに手際が宜い外に驚る
いて居た太郎作花之丞も甲「乃公もやつて貰はふ乙「イヤ私も願
う權「チイく乃公の方へ誰か來さつせエ手があいたら甲「イヤ
樋兵衛どんお前は止さう客人の方が江戸風について呉れて宜い
氣持らしい權「チイ乃公の方が本家ぢやアねへる出店が繁昌して
乃公の方へ來ねへつてエ事があるの甲「マア宜いや夫ぢやア客人
に願んでお前一ふく吸はつせエ權「成はど夫も宜らう客人お願う

樋口義勇傳

申す大層一同の者に賞うやされ其夜馳走に相成り一泊いたす
權兵衛段々當人身の上と尋ねると越中富山の生れにて博奕の事
より故郷に少々不都合と生じ重五郎と便つて参りしが本人不在
別段往く所もないといふに依り當分乃公の處で遊んで行くが宜
いと留めしは名前と甚吉と申す者にて前申上た通り仕事は宜し
世辭は宜し村内の者に愛せられ權兵衛床に當分足と留める事に
なり出仕事は樋口十郎左衛門庄屋菊地利右衛門西福寺といふ禪
寺跡は床場に居ります頃しも十一月十五日樋口の方へ變置と提
げ甚先生今日は十ッ一甚吉か甚へ御風邪氣だといふ事と聞ま
しただ結日だらら参りましたが如何です十ッ大した事もなし
鬢が延びて氣持が悪いらやつて貰はう甚長こまりました今日
は御新造や息子ちやんは何うしました十ッ一庄屋利右衛門の
方に喜こび事があつて家内は粹や利根右衛門を連れて参つた甚

樋口義勇傳

ハ夫ぢやアか一人ですな十ッ其處に金置があるら湯とく
んで来て呉れ甚へ其の標側が宜うございませう梅の上へ樋口
は着座いたし日あたりの宜い標先にて上手に鬢と剃られし事も
ゑ宜い心持に相成りウツ致して居る邊と伺が以髮結甚吉取
直せし髮剃樋口の咽喉へ貰ひいたりアツと云ひさす十郎左衛門
甚吉の利腕と取て庭前へ投付け己れ曲者と叫ばんと致せしが咽
喉と深く貰ひぬれし事ゆゑ聲は立たず甚吉起上り取出だしたる
呼この笛ヒッ……之を合圖と見えドカッと進み来りしは何
れに隠れ居たる荒井大受相馬源藏菊川佐七の兩人と連れ前後
より樋口とみつ取り包んだり

第十六席

油斷大敵とは古人の金言鬼といはれし樋口も油断と致せしに依
り思はぬ不覺大覺は源藏に申附け甚吉に大小と渡せば手早く支

種口義勇傳

度といたし十郎左衛門に向ひ甚如何に親爺能く承たまはれ某し
義は加賀金澤の産細井甚吉郎と申し荒井彈正先生の御取立てに
預りし者然るに何日ぞや大恩受し先生は汝の爲に非業の御最
期御舍弟大覺との兄の仇と討たんとて金澤へ御出でにあり拙者
へ御相談ありしゆゑ某し計略と以て髪結職となり汝の油断と附
け狙ひしが今ぞ天の時と得て先生の無念と晴らし奉つらんと
たすイテ尋常に立上つて勝負といたせ大如何に種口只今細井の
申した通り兄の仇と報はん爲め大覺是へ來つたり尋常の勝負に
及べと一刀の鞘と拂ひ眞甲にふり冠つて來る源藏佐七も口々に
罵しり四方より進み來つたり種口は聲は立たず得物はなし無念
骨髄に徹し前にありし金盃と取り四人と對手に暫らく争ひし
が何ぞ堪らん急所の痛手と受し上四人の爲に切り立てられ淺手
深手と被むりハツタリ夫へ倒れる大覺は留めと刺し種口の家内

種口義勇傳

と取調べ有金百兩餘り其の外衣類等と奪ひ甚吉郎に支度とさせ
何れへも退散をいたす誰れも彼らといふ夕暮ニモ先生只今
戻りました還付御新造も若先生もお戻りでござい升利根右衛門
でござい升大きに遅刻といたしました……ハツナ何う遊ばしたら
う、ヤレ暗くなつたら明火でも附やう獨り言と云ひ行盤を取出
だし火と點し利先生……ハツナ是は如何遊ばした、ヤア先生
と種口の死骸と抱上げ聲と限りには呼はるに秋利根右衛門や且那
様は何う遊ばした利、ハツナ御新造大變が出来ました秋、ハツナ大變と
は利、ハツナ先生が斯様な姿になら遊ばしました秋、ハツナどう遊
ばしてと餘りの事に呆れ果て、十次郎諸共死骸に取附き前後正体
もあらく泣倒れる利根右衛門は庄屋利右衛門方へ申入れ、ば其の
場居り合したる者一同來り留者よ薬と騒ぎ立ちしが何ぞ種口
の命と返さんや秋十次郎は宛然狂氣の如く利右衛門兩人と留



樋口義勇傳

め茲に變盟のある上は髮結甚吉辨まへて居るに相違なし彼と尋ね様子と聞ると權兵衛床へ参り聞き合せしに仕事に参りしより未だ戻らず荷物と見れば脇差諸共見えすとの事餘義なく利右衛門引返し何る証據になるべき物あらんと調べるに床の間の所に血汐と以て貼り置きし書翰荒井大覺細井甚吉郎樋口十次郎へといふ書附け取る手遅しと開封いたし見れば荒井彈正御前試合の初り樋口の爲に打たれし無念を晴さんと存じ細井甚吉郎と以て手引と致させ兄の仇と討たり十次郎は我々と父の仇と心得るならば何日にも出逢ひ次第尋常の勝負致すべき赴むさと認めたり利モ御新造若先生是にて思ひ合されました甚吉と申す奴尋常の者にてはあるまいと思ひしに扱は荒井の門弟であつたか然うとも悟らずク彼の計略に乗つたるころ殘念の至り遠くへ参る事もよもあるまし今の中に手分けいたして先生の無

樋口義勇傳

念を晴さんと村内の者と呼び集り八方と尋ねしが更に行術知れず餘義なく此段御領主へ申上げ檢視役人御出でに相成り死骸は妻子へ御引渡し妻子は利右衛門利根右衛門共に親類と呼び集め涙ながら菩提所西福寺へ埋葬といたす初七日の夜母は十次郎に向ひ秋如何に十次郎御身も侍の家を生れし上は我が申すまでもなく父と討たれて其の儘に致して居るべき法やある速やりに登り足いたし敵大覺等と尋ね父の仇と討ちとめ故郷へ錦を飾り歸國いたし玉へ十ハイ母上の仰せまでも候はず假令返り討に相成るまでも此儘致して置くべき譯の者ならず利右衛門の某し出立の後は母上の身の上何分宜きなりに頼み存する利是は御新造といひ若先生の御勇ましき御詞ではござるが敵大覺は容易あらん腕前其上彼に三人の門人必らず傍はらにあるから勝利是東なく未熟ながら某し先生へ御恩報じの爲め御助太刀いたさん秋是は

樋口義勇傳

利右衛門殿の御詞添けなくはござりますすが敵討出立は十次郎一人に限ります其の譯如何にとあれば今更後悔いたしたるは養子十三郎妾の心得違ひより只今では勘當の身の上彼の十三郎だに居りしならば長夫十郎左衛門より斯様不登は取りますまい草場の影で長夫は妾の心得違ひと定めし今頃は立腹いたして居りませう實子の愛に溺れし妾の罪万一十次郎返り討に相成たと聞らば義に強き十三郎必らず父舎弟の敵大覺等と打取て呉れ申さん其の節妾は長夫并びに十三郎への申譯は仕つる間敵討出立は誰一人とあつて助太刀は頼み申さず不便ながら十次郎一人に致させますといふ中ハラと悔悟の涙利右衛門同じく涙と流し菊ア一過まつて改たむるに懼る事なし能く後悔となすつた、いづぞやは御身と御諒の申し十三郎殿を尋ね勘當の御詫といたさんど存じて居りました、其中不慮なる大先生の御最期然らば

樋口義勇傳

某しは助太刀は致すまい、十次郎殿其の心得して行き玉へ、十、委細長こまりました只跡々の義は宜るにお計らひと願ふ、いふも聞くのも先立つ涙利根右衛門進み出で、利モ、御新造只今の御言葉と承たまはり、數ならぬ私し感服いたしました、荒い風にも當りし事あさ若旦那御一人の御出立は御道中御不自由でお出でになりませう此の親爺は先年已に大勢の爲めに殺されべき所と大先生に助けられし御恩返し若旦那の御供といたし身と粉に碎いても敵と尋ね出ださせう私しだけは御供とお免し下さいませ、秋「イヤ利根右衛門、お前とてもなりません、十次郎一人に限りませ、利「イヤ御尤もござりますすが強て私し願ひます、菊地の旦那貴郎から御新造へ願つて下さいませ、菊如何さま尤ももの至りだ御新造利根右衛門が今の言葉彼れだけは免しておやんなさい強ての勤めには秋漸々承知いたす、利右衛門より安藤右京之進へ改た

樋口義勇傳

めて願ひ敵討免狀と真戴いたし吉日と撰み十次郎利根右衛門と
連れ住み馴れた我が家と跡に敵大覺は加賀金澤の出生ゆゑ先づ
彼が故郷と尋ねんと出立いたし馴れぬ旅にて足と痛めし十次郎
といはれたり歸せしたり利根右衛門さまく苦身といはし金
澤と尋ねしが更に行術知れず越中富山其外諸所方々と尋ねる中
に其の年も経ち翌年二月のはじめ十次郎は瘧の病ひに罹りしが
初まりとて身体殊の外衰へしと漸々勞はり飛彈國富山在落合
村の利根右衛門が故郷へ連れ來り悴は沼田川利根殿とて田舎相
撲と家業の片手間女房お岸と悴利根松とて當時七才に相成るも
のと三人暮しの中へ足と留り十次郎の病氣と勞はりしが病ひは
益々重るばり長の旅路に路用の金子も手薄にありしと夫婦の
者は黒木と商ひ幸くも其の日と送り居る所へ病人と連れ
父が暫らく逗留もる暇も目も寝られぬ貴苦の中に悪い説と更に

樋口義勇傳

せず利根右衛門は利モ若旦那私しやア吉田村の松山立達先生
といふ此の近邊にあり名人のお醫者さま薬と貰ふ約束として置
きましたチヨツク行て参りますらぬ淋らうが利根松と對
手に少々お待なすつて下さい十ツム利根右衛門や何やら何まで
世話になつて氣の毒だ利モ飛もあゝ事と決つて御心配となさる
な、利根松貴様は若旦那の御足でも擦てる松アイ益さん往ておい
で利モ一く感心く益が戻に土産と持て來てやるらな……ア
困つたものだ、生憎に雨が降來た、夫ぢやア若旦那行て参りますと
云ひつゝ十次郎の貌と眺め思すハツくと落涙ア一此んあ姿に
おなんなすつたも皆な敵の大覺がした業、早く御病氣と直して御
本懐とお遂げあさい、トは云へ此の分ぢやア敵討とも覺束ない、と
思はずもらす溜息に十次郎は十利根右衛門乃公は何だの貴様は
別れるのが思だ利モ一ツ飛でもあゝ長く掛る譯ではなしツイ一

樋口義勇傳

走りてござい升、御免なさいと云いながらも跡へ引ゐる、後れ髪
心と決し仕度といたし笠と目深に頂だいて急いで参る吉田村薬
を貰つて我が家とさしてビヤ／＼と雨の中をも厭はゞころさ、
し掛つたる雁木坂向ふの方より、三人連れの武士先立ちになりし
は身の丈抜群に勝れ大小と打込み笠と横にして雨と霞き摺り違
いさま利根右衛門とワロリと見て大「待て其方は真庭の樋口の召
使ひ利根右衛門といふ親爺だな利「ハイ私ア利根右衛門でござい
ますが貴郎は何方で被爲入いますか大「コレ乃公が面体とよも忘
れはしまい利「チ「然ういふ貴郎は荒井大覺先生大「如何にも汝と
十次郎の兩人拙者等と十郎左衛門の敵と附狙ふと承たまはりし
が茲で逢ふとはモツケの幸はい尋常に勝負を致してやらう相馬
菊川宜い者に出遇ふたぞ相「成はと此の邊に居るとは承たまはり
ましたが茲で面會致さうとは思はんのでありましたヤイ親爺我

樋口義勇傳

々兩人は分て汝に意恨と含んで居る、ア尋常に勝負とすると手
早く三人仕度といたし刀の鞘と拂い詰寄るを利「ア「モ「暫らく
お待ち下さい仰しやる通り私しと若且那各々三人と附け廻しち
やア居るやうなもの、若且那は御病氣其のお薬と取りに参つた
大事な使ひ茲は何うか御勘辨と願います、何れ御全快次第大「黙れ
汝の自由になるべき何と申しても用捨は相成らん、ア立て勝
負としろ利「エ「新様申上ても御聞入れがありません、大「如何に
も聞き濟む譯には相成らん利「然ういふ譯なら仕方がねへ、云ふよ
り早く笠箆投げ捨て腰に帯たる脇差の鞘と拂つて叶はぬまでも
主人の敵「ア来い來れと立上る、三人一度に切り込む一刀腕に盛
えの老人前と拂ひ後ろを防ぎ暫らくの間争うひしが何れは以て
堪るべき三人は笠に掛つて切り込む一刀老人の足元危うくツル
ツと這つた邊と伺ひ切り込む大覺の一刀左りの肩口へ切り込ん

種口義勇傳

だり殘念だつと横に拂つた一刀は聊さるながら大盛の高股へ切り附る己れ親爺と後の方より源藏が切り込む一刀は元より脊筋と掛けて割り附けられのめると續いて佐七の一刀は腕をひきし脾腹へ切り附られ無念くと齒噛といたすを三人寄て一寸試し五分試し忠僕茲に空しく最期と遂げました

第十七席

忠といふ文字は口といふ字と書て下に心といふ字と書き上より下へ棒と通し口と心と變らざるといふ意味合ださうで言ふべくして中々行ないがたいものであります沼田川利根藏は親父は利根右衛門が大恩受し御主の悴十次郎と連れ参りしより星と頂だいて出で月の出るまで業と營るみ今日しも脊負指子に山の如く高荷と附け女房お岸も同じく荷物と脊負ひ誰だる彼の夕まぐれ我が家と急ぐ雁木坂利お岸や道が悪いのら氣と附る岸ハイ夫

種口義勇傳

でもア宜い鹽梅に雨が歌みました利ウ父さんが定めし待て居なさるだらう岸ハイ利根松も若旦那と諸共に待て御座いませう急いで来る利根藏は利ヤア危ねへ何の茲に轉がつて居る岸ハイ何があります利ヤア大變だ誰か茲に寝て居さつしやる人がある岸何ですとアレマア是ア死骸だ利チー……ヤア父さんだ岸エー、ナコ父さんがと驚ろく夫婦荷物と夫へ下し寸斷る相成し親父の死骸眞の遺骸と抱起し利チー親父さん岸親父さんと呼べと叫べと玉の緒の切れて何處へ宿らんうろくして居るお岸に向ひ利コレ察する所是やア敵の大變何のに川邊に討たれた事に違ひあるまい今さら嘆いても仕様がな死骸は家へ連れて行き葬むり申上げよう岸ハイ、どうして此ういふお姿になんすつたる餘りといへばお情ないも嘆くと留めて死骸と脊負ひ己れが家へ歸りしが十次郎利根松に知れざるやうに一間へさ

傳勇義口極

し置き、庄屋田中傳兵衛方へ申出内々檢視と願ひ善處所へ拜じり
ましたが十次郎利根松へは急用出来いたし眞庭村へ参りし趣む
きと申入れ内々唱名念佛と唱へ今日も初七日心ばりの佛事と
營む門邊に〇願ひくと呼ぶ聲利ハ何方でお在でござい升
立出る間もなくエツと這入りし四人の武士何れも利々しき掛
〇沼田川利根殿とは其方の利左様でござい升私しが利根殿で
さい升貴所は何方お出でになりました〇ウー、然らば汝の
方に樋口十次郎参つて居らう利ハエ貴郎の御姓名は〇乃公は十
次郎が父の敵と尋ねる荒井大覺是に扣えて居るは門人細井甚吉
郎相馬源藏菊川佐七利エーッ夫ぢやア貴郎が……大如何にも敵の
大覺十次郎に面會といたし尋常の勝負いたさんと推参いたした
イヤ尋常に立上つて勝負いたすやうにと、我は討たれに参つてや
つた利ア、モ有難うございますすが若且那は長らくの間の御病

傳勇義口極

氣進も今勝負といたせと仰しやつても出来る者ぢやアございま
せん大ウー、十次郎は病氣だど何處に居る此の承たまはりし
十次郎二枚折の屏風と取り除け枕邊にあつたる一刀と引附け苦
しき息と吐きながら十何といふ利根藏敵の大覺門人と連れて参
りしとる假令身体は自由ならずとも眼前敵と見あがらに此儘に
見廻す法のあらんや叶はぬまでも勝負いたさんと心は矢作には
やれども立ち上がつてはヒヨロハッ、利根松お岸の留む
ると聞かず立てはハッ、後ぬに倒れ無念の涙と流す様子と詠
めて大覺が、大コレ十次郎汝は父の敵なりと我と尋ねると承たま
はり討たれに参つたまだ其の上にな共達て雁木阪に於て利根右
衛門に出遇ひしゆゑ彼れと返り討ちに致して遣はした逆縁が
ら家來の敵父の仇たる某しが尋ねて参つたはモツケの幸はひな
らずやア立て立てんら十ナは扱は利根右衛門は眞庭に参りし

傳 勇 義 口 樋

財を取り片附け利根藏は十次郎を背負ひお岸は利根松と背負ひ
庄屋をばしり近邊の者へもソコノに暇乞ひといたし當所へ出
立日と經て權九郎の方へ落附き當分の間厄介に相成る初め終り
と承たまはりし權九郎いと快よく承知いたし十次郎の病氣の看
護は利根松と諸共致し利根藏お岸は里へ出で、は旅人の荷物
持ち運びお岸の賃錢と得て今日と送る中にさるさだにひがなき
暮しの中に十次郎の病氣ゆる貴苦は愈よ重なるつて如何とも致す
事叶はずお岸は又に向ひ岸へ親父さん利根藏の居る時には此
んるお岸も出来ず若旦那は能くお休みも申上ますが權九郎何
だお岸へハイ外ぢやアとさいませんが先程もお醫者様の仰しや
るには御病氣と一日も早く癒さうといふには人妻身厚角などい
いふ高い藥と盛んければ逆も全快は憂束ないとの事然うるとい
つてお岸の稼ぎゆる暮しに追はれて手當も出来ず權九郎乃公

傳 勇 義 口 樋

も以前と違ひ年々と老た上に一昨年の暮婆アに分れなけなしの金
と費ひ今ぢやアお岸の職通も附らず岸ア夫だあら私も苦勞と
して居るのだ何うでせうお私のかやうなものでも淨き川竹へ身と
沈めたらせめて良いお藥の一おく位はさし上られやうと思ふ
んでそが何方へお身と沈めさしちやア下さりますまいお權九郎
威心だ能くいつた乃公の娘で賣るぢやアねへが十人並の其の容
貌二十五とはいへ貴様は若く見える貴義理ある中の利根藏も聞
たら乃公に對して承知も出来ぬ幸はい以前稼業を手廣にして
居た其の時に別して御最負になつた甲府櫻町あづさや兵右衛門
様お尾張屋の旦那へ願つたら無理の事でもして呉れやう岸ハ
然ういふ傳手があるならどうぞ何分願ひます權九郎宜しく明
日の朝早く出立して万事宜いやうに計らつて来やう岸ハ何分
お願ひ申升と云ふも語るも先立つ候其の夜は臥り翌日は早くよ